移行期ロシアの社会経済地理
―ライフヒストリーによる接近―

Социально-экономическая география России в переходный период: биографический подход

小　俣　利　男
OMATA Тосио
シャルピン　デニス*
ШАРЫПИН Денис

I　はじめに

日本におけるロシアのイメージは多義的である。一方では、確かに日本の多くの人がロシアのクラシック文学・音楽・バレー・文化に関して深い興味を持っている。他方、北方領土問題は半世紀もの間両国の主要な障害となっており、そして最も近い隣国に対して日本人に不確実性や不安を生じさせてきた。このようなイメージの不均衡により、日本社会に多くの誤解やステレオタイプが形成された。否定的なイメージが定着し、事実とは異なったそれらのイメージが長い間変わっていない。そのため日本人はロシアに関してあまり興味を示してこなかった。

ソ連解体後、既に 15 年以上が経過した。新ロシアは激しく変化してきた。計画・指令制経済から市場経済へ転換した上、経済諸関係も人々の価値観も大きく変わり、社会自体が大きく変わった。この移行期は非常に多くの点で困難を伴っていた。ソ連崩壊後、経済が危機に陥って、一般の人々は苦しい経験をした。多くの人は何もないところから始めなければならなかった。ソ連時代の前途有望な職業の多くは不要となった。人生への挑戦、生存競争は人のライフスタイルを変え、新しいタイプのロシア人が形成された。

これまでの社会・経済地理学的研究は、例えば小俣（2006）のように、移行期にあるロシア社会の変化を主に経済や産業の変動を中心にして捉えてきた。本稿の目的は、可能な限りロシア人の現実の生活に近づけて、社会・経済的な変化を解明することである。そのために、一ロシア人のライフヒストリーを例にして、新しいロシアの形成過程における人々の社会生活上の特徴と社会基盤の変化を明らかにする。この点で解明対象や方法は異なるが、ロシア社会を虫瞰するための諸研究[1)]、

とりわけ中村（2006）は住民目線で日常生活の変化の中から体制転換を捉えようとしており、本稿と問題意識を共有する部分もある。

本稿のようなアプローチは総合化や構造化を基本とする典型的な科学的手法とは異なる。事実、一人一人の人生はユニークであり、社会の構成員の１人についてのライフヒストリーで社会の総合的なイメージや全体的な傾向を解明することはできない。しかし、丁寧にまとめたられたライフヒストリーが本稿の重要な部分となっており、このアプローチによって、社会を内側から見ることができ、社会の諸側面を１人の生活者を通じて統合して捉えることもでき、さらに居場所や社会的地位に応じて人にどのような選択肢が与えられているかを明らかにできる。

さらに、本稿のような研究はテーマの解明や学術研究上の方法・視点を検討するために意義があるだけでなく、ライフヒストリーの部分は放置すれば時間の経過とともに風化するソ連・ロシア時代の半世紀にも及ぶ移行期社会を含んだ貴重な記録とすることもできるし、かつロシア社会の理解を深める一つのステップとしても位置づけられる。

また、筆者らの研究目的を理解していただいた上で、レナ（仮名）さんは「我が両親に捧ぐ」という気持ちを込め、「ロシアのある家族についての話」と題して記憶をたどりながら、2006〜2008年に数回に分けて、語り、メモを作っていただいた。こうした研究では一般的であるが、プライバシー保護のため、ここでライフヒストリーを語ってくれた方はロシア東部の大河に因んでレナさんと仮称し、旅行先などを除いた場所、その他の国有名詞も使用していない。同様に、本稿では「連邦構成地域」という用語を使用する。これは現在の連邦構成主体レベルの行政地域を指し、具体的には共和国、クライ、州、自治管区に当たる。

Ⅱ　ロシアのある家族についての話

１．レナの生まれ故郷

レナは1961年にロシア北部地方の一農村にて、教師の家庭で４番目の娘として生まれた。レナたちの村は大河に面し、北極海から数百キロのところにあった。その上、大きな都市も町も、レナの生まれ故郷から遠く離れていた。それはただ単に大きな距離というだけでなく、レナたちの住む地方では道路が絶対的に不足しているためでもあった。村までは、冬になると乗員12人のAN-2[2)]という小型飛行機に乗って行くことが出来た。夏すなわち６月から10月までは、川がレナたちに必要なものを全てもたらしてくれた。そして川船やボートは基本的な移動手段でもあった。村々の間は約30kmあり、行き来は限られている。冬には冬道[3)]を馬で行き、夏は大河をボートで行くことしかできない。

中核地域から遠く隔たったこの地方には、ロシアの非ロシア系少数民族の一つが住んでいる。約250年前にこの地方に最初の移住者がやって来た。漁獲や狩猟で生活していた。レナが子供の頃、村の住人の多くはコルホーズで働いていた。ここは牧畜業コルホーズであった。当時、村の人口はおよそ1,000人だった。村人は多産であり、家族によっては子供が10人を超えることもあった。普通、どの家も大家族を扶養しやすくするため、乳牛を所有していた。また、わずかな土地を耕して、そこでジャガイモを栽培した。

村には8年制学校[4)]、幼稚園と呼ばれる午前7時から午後7時まで両親が子供を連れて行って預ける施設、2人の看護師が働いていた救急診療所があった。そして、一つは食料品、もう一つは日用品を扱っている二つの店、郵便局があり、クラブでは映画が上映され、週1回ダンスパーティーが開催された。さらに図書館、テーブルが三つだけの食堂、小さな製酪工場とパン焼き所もあった。一つの建物があり、そこにコルホーズの管理機関、村の行政機関、共産党委員会が入っていた。当時、ロシアにおける政党は、唯一の愛すべき共産党だった。「全ては党のために、全ては国民のために」という共産主義のスローガンは、全てのものが国家のものということを意味していた。教育と医療は無料だった。

村は大河の岸に沿って延び、1本の通りが走っていた。その通りは舗装されていないわけではなかったが、それに沿って歩行者用の板敷きの歩道が造られていた。村内の交通機関は少なく、数台のトラクター、3台のトラック、コルホーズ所有の馬だけであった。私有の自動車はなかったし、オートバイを持っている人もまれであった。

北の夏は短かった。乳牛用に干し草を貯蔵する作業を2ヶ月間で終えなければならなかった。そのため村人はこぞって休みも取らずに数週間働き続けた。雨天時の、めったにない休日には、村人全員がベリー（実）やキノコを採りに出かけた。私有の家畜にやる飼料の貯蔵作業をするための時間がなかった時は、コルホーズ員はこっそりとコルホーズの干し草をもらわざるを得なかった。

冬は長くて、雪が多い。どの家にも暖房のためにペチカがあった。薪はたくさん必要だったし、周囲は森であった。冬の短い昼間に、村人は森へ薪を採りに行った。水道もなく、水を樽に入れて馬で川から運んだ。人々はあくせくすることなく、仲良く暮らしていた。近所に住む人々は互いによく遊びに行き、必要な時には助け合った。ドアに鍵はなかった。入口のドアに棒が横切って立っている時は、留守をしているということである。村には犯罪がほとんどなかった。最も近い交番は地区中心地村にあった。この地区中心地村はレナの村から冬道で110km、直線距離を飛行機で飛んだ場合は50kmのところにある。

レナの生まれ故郷は小さく、そこは樹木の密生した、通り抜け不可能なタイガに取り囲まれた村であり、ここで子供時代を過ごした。

2．レナの祖母

レナの父は祖母の長男であった。彼女に因んでレナの名前が付けられた。大好きな祖母は素晴らしい女性であった。小学校の3年生しか卒業していない彼女は専門教育を受けずに人体のことをすべて知り、村の接骨医であった。祖母は自分が住んでいる村人のみならず、近隣の村人も治療した。彼女の家のドアもいつも開いており、いつでも皆を歓迎していた。村の労働は厳しかったので、人々はよく怪我をした。祖母は、昼夜にかかわらず、声がかかるといつでも人助けのために出かけた。脱臼を治したり、捻挫の時に奇跡が起こるマッサージをしたり、頭痛を治したりした。治療費はもらわなかったが、皆は可能な範囲で感謝した。ある人はよい言葉で、ある人は魚、肉、その他の食物を持ってきた。

晩年、年金生活者になってからは、祖母と祖父は鹿毛のピームィを作って稼いだ。ピームィというのは鹿毛から作り、ビーズとリボンで装飾を施した履物である。祖母は手でピームィを縫い、祖父は底をつけた。この仕事をして、金をもらった。それは少ない年金には相当な追加収入となった。

年金生活に入るまで、祖母は苦労な仕事をたくさんした。戦争前、製材工場で働き、丸太を運んだ。その後、河川航行用の平底船を造る造船所で船底被覆の隙間の防水作業をした。戦争時、雄牛による運搬人として働き、重い荷物を運んだ。馬を戦争に取られたので、通常、村では雄牛を使って荷物の運搬をした。彼女は100kgの袋を自分の肩に乗せ、荷車から倉庫まで運ばなければならなかった。戦争後、製材工場労働者用の制服を作った。夜は村の女性からドレスの注文を受け、衣服を作った。家族は大きく、5人の子供を養い、教育を受けさせなければならなかった。

祖母は9人の子供を産んだが、残念ながら、4人は幼時に亡くなった。最初の子供を23歳の時に産み、最後の子供を47歳の時に産んだ。4人の子供は高等教育を受けた。一番下の子供は既に年輩の両親の下で育ち、両親の手伝いも必要になり、都市の大学で勉強するために、長い間村を離れることはできなかった。

祖母と祖父が自分たちで建てた家は、ほとんど川岸にあった。家の中はいつも綺麗で、心地よく、食物のおいしい匂いがしていた。家にあった綺麗な家具はどれも祖父によって作られた。

特に、二つの窓の間に掛けられた、透し細工の木枠に入った鏡は、とても記憶に残っている。鏡の側に飾りとして手作りの麻のタオルが掛けられていた。祖父と祖母はよくこの鏡の下に座り、仕事をした。鼻歌を歌いながらピームィを作った。その後の昼食時、レナは必ず祖父の膝の上に座り、彼はレナのことを優しく“クリェビャカ”と呼んだ。これは魚が入ったピロシキのある種類である。

祖母は大きかったが、とても器用であった。彼女はあらゆる仕事をこなすことができた。彼女は陽気な人であり、大変な生活にも関わらず、若者の元気があった。彼女は可愛い母方のお母さんのような静かで、落ち着いたおばあちゃんではなかった。祖母は大きな声で話し、大きな声で笑った。人生を愛し、人々を愛した。人々も彼女が好きだった。多数の人を苦しみや痛さから救った。多くの人は怪我をしてから2番目の人生を与えてくれたので、彼女を2番目のお母さんと呼んだ。

50歳になってから彼女にこの才能が現れ、20年間接骨医をして人々を助けた。レナは彼女の祖母を決して忘れることはできないと思っている。

3．オクチャブリャータ、ピオネール団員、共産青年同盟員[5)]

多分、5歳から自分のことを覚えている。レナは2歳下の弟と大変に仲が良かった。一番年下で、レナたち家族の6番目の子の誕生もよく覚えている。レナの子供時代は、人数が多く、仲の良い家族に囲まれて幸せなものであった。冬、厳寒の時には、両親はレナたちを大きなロシアペチカ[6)]の上で横にならせて寝させたが、そこは暖かくて、狭くて、面白かった。朝になると、レナは弟と競って、両親の暖かいベッドへ走り込み、そこで父はレナたちに星について話してくれたり、美しい詩を語ってくれた。この詩を今でも暗記している。厳寒でなくなった時は、3人の姉が近所の友達と一緒に巨大な雪の吹きだまりに「雪の町」を作り、時々レナたち下の兄弟をそこで遊ばせてくれた。父は新年の祭りには大きな部屋の天井まで届くほどのクリスマスツリーを家に設置した。羊の毛皮裏の室内着をひっくり返して着て、物語のキャラクターを演じながら、クリスマスツリーを回ってレナたちと一緒に歌い、踊った。

ここで上述の雪の町について補足説明をしておきたい。雪の町はレナの姉妹とその友達によって作られた。当時、村にはテレビがなく、村のクラブでは映画が週に1回上映されるだけだった。村の子供は読書が好きではなかった。北部地方では、夜が長い。午後5時過ぎには暗くなってしまうため、両親は丘でそりに乗ることを禁じた。1家族には6～8人の子供がいた。両親から頼まれた家事を終えると、また外へ行く。冬には3mも雪が積もった。レナたちの家の側には、大きな雪だまりがあった。この雪だまりに、子供たちはトンネル（穴）を掘り、雪の「部屋」を繋げた。部屋の高さは約1mであり、レナたちの遊び場だった。大きな部屋もあったし、小さい部屋もあった。レナたち小さい子供は、小さな部屋で遊ばされた。部屋の中で座れるように雪でベンチを作った。その後、家からろうそくを持ってきて火をつけ、小さい瓶の中に置いた。そこでとても楽しく時間を過ごした。

不便で重たい服を着ながら、トンネルを部屋まで四つん這いで行くのは、レナにとっていつも怖かった。しかし、ろうそくに照らされた幻想的な雪部屋に入ったら、怖さを忘れ、嬉しくなった。雪の中は暖かい。そして、狭い空間の中で、呼吸をすることにより、コートのボタンをはずせるぐらいに気温が上がった。外は厳寒で吹雪だったが、レナたちは寒くなかった。ある時、村の馬鹿者がレナたちの迷路で一晩過ごした。家から出されて可愛そうな彼は、その中に入って、ベンチの上で寝た。レナはもう雪の町を作らなかった。そのような仲間もいなかったし、夜はテレビを観て過ごすようになった。

学校へ入学する前に幼稚園に通った。保母さんたちはレナを可愛がってくれたので、喜んでそこ

で時間を過ごした。ある時、レナは友達と幼稚園に行かないで、午前中、村を散歩することにした。あの時、既に旅行に憧れていた。川の方へ行ったので、このことに両親はとても驚いた。というのは、その時は春で、川は著しく水位が高かったからであった。レナの友達は向こう見ずで、いたずら好きな子供だった。レナは彼女と一緒にいて満足だったし、楽しかった。しかし、間もなく彼女の母親が亡くなり、都市の寄宿制学校に行かせられ、とても残念だった。ところで、その散歩に行った時、レナの両親は驚きのあまり、レナを怒らなかった。父だけは「どうして逃げたのか」と聞いた。「友達が呼んだから」とレナは答えた。その時、父はいつも自分の行為に対する責任を取ることをレナに教えた。彼は「友達が井戸に飛び込もうと思っておまえを呼んだら、跳び込みますか」と聞いた。レナはとても恥ずかしくなり、その時から自分の行為に対する責任を他人に転嫁しないで、自分自身で取るようになった。

夏には、隣村の祖父母の所では他の兄弟や姉妹が来ていなかったので、レナはプリンセスのように花形として生活した。レナより12歳と15歳それぞれ上の2人の叔母は人形のようにレナの面倒をみてくれ、レナに洋服を作ってくれた。彼女に因んでレナの名前が付けられた祖母と祖父はレナを甘やかした。冬に備えて両親は迎えに来たが、それをレナも祖母も望まなかった。ある時、川が凍り始めた晩秋に、母はレナを家に連れ帰るために、隣人からボートを借りた。しかし、レナは祖母とベッドの下に隠れ、母がいくら呼んでも答えなかった。母はレナたちを見つけて、レナをベッドの下から引き出し、冷たいボートに乗せた。道すがら、母のことを怒り、祖母を思って泣いた。

中核地域とレナたちを繋げていたのはラジオであり、それは社会主義体制を称賛した、にぎやかなマーチをよく放送していた。レナも実際にソ連の生活は素晴らしいと思っていた。レナはいつもお腹がいっぱいだったし、洋服もあったし、皆に愛されていた。子供にはこれ以外何が必要であろうか。

7歳になって9月1日に入学した。8年制学校は家の近くにあり、レナの最初の先生は母だった。まだ一番下の弟に母乳を飲ませていたので、授業の休憩中に、家まで急いで帰った。ある時、とある理由で遅くなり、休憩が長引いた。レナたちは机の上を走りだし、筆記用具として使っていたインクで同級生を汚してしまった。1年生の時は、まだインク式のペンで書き、インク入れを学校に持って行った。しかし、2年生になると技術の進歩はレナたちの村まで届き、ボールペンが現れた。

母はレナをクラス内で特別な扱いをすることはなかったし、それどころか時折、レナの成績を過少に評価することもあった。彼女はレナが模範的な生徒であり、迷惑をかけたことは全くなかったと言っていた。これは母には驚くべきことだった。というのも、レナは入学する前は気まぐれで、わがままな子供だったからである。

1年生の時、皆がオクチャブリャータに入隊した。オクチャブリャータというのは全ソ連邦の児童組織であり、大十月社会主義革命を記念して命名された。革命記念日である11月7日に行われた儀式で、厳かにバッジを服に付けられた。レナたちは我が共産党に忠誠を誓った。バッジには若いレーニンが描かれていた。制服に付けられたこのバッジは、「私たちは共産党の未来であり、

さらによく勉強しなければならない」ということを意味していた。「勉強、勉強、さらに勉強」という偉大なレーニンの遺言が書かれたスローガンが、ほとんどすべての教室に掛けられていた。悪いことをしたり、あるいは勉強をよくしないと、オクチャブリャータから除名される可能性もあった。レナは共産党に入っていることを誇りに思っていた。レナたちの村では、党組織は大きくなかったが、父は共産党員だった。レナは父をとても愛していた。父が母の判断で何かよくないことをした時、母は「共産党員なのに」と言った。これは、共産党員は全てにおいて模範とならなければならない、ということを意味していた。共産党は「我が時代の知性、名誉、良心である」というのは、当時、ソ連のどこにおいても見られたスローガンであった。

ピオネール組織には全ソ連の9歳から14歳までの子供たちが加入した。3年生の春に、レナはピオネールに入隊した。首に赤いスカーフを巻き、レナはもう一度、共産党への忠誠を誓った。しかし、皆と同じになりたくないと思った時、反抗の気持ちが既にレナの心の中で芽生え始めた。

長い冬の後、春になると大河には砕氷船が航行していた。ソ連ピオネール記念日である5月19日に、全校が遠足に行った。最も素晴らしい季節だった。ラジオから流れる喜びに満ちた歌は、村のいたるところで聞こえた。人生は素晴らしいと思えた。気になっていたことは、明るい太陽を浴びることによって、しだいに増加する顔のそばかすだけだった。

川面の氷に解けた部分が現れるようになるとすぐに、女友達と2人だけでお出かけをした。食べ物を持って、ピクニックに行った。焚火の周りに座って、砕氷船を見るのはとても楽しかった。

家事においてレナの責任となっていたのは、パンの購入であった。食料品店には長い行列ができ、荷車を付けた小さな馬がパン焼き所から新鮮なパンを運んでくるのを、皆は待っていた。パンの値段はとても安かったが、家族の人数は多く、皆パンをたくさん買った。そのため、必要な分を買えるように、行列の前の方にいなければならなかった。レナはいつも行列には並ばないで、うまく買うことができた。だから食料品を買うのはレナの仕事になった。それ以来、大人になってからも、行列に並ばずにうまくやってきた。例え、ソ連の行列が数キロになろうが、特に全体として不足している時でも並ぶことはなかった。

もう一つのレナの家事は、夏に川から水を運んでくることであった。村は高い岸の上に位置している。両親は一日中、牛のための干し草作りを行い、姉たちは両親を手伝っており、レナは小さなバケツを持って、水を汲みに行った。

両親はレナたちを可愛そうだと思い、農村のつらい労働が少なくなるようにしてくれた。レナたちが休んだり、海で泳いだり、いろいろな所を見ることができるように、レナたちを順番にほぼ毎夏、南の海やより暖かい地方へ行かせたくれた。例えばレナたちの村から黒海まで行くのには1週間ぐらいかかったのにもかかわらず、レナは生徒時代に、この暖かくて素晴らしい海岸へ3回行った。

それにもう一つ、夏休みには近所の子供たちと、かくれんぼをして遊んだことをレナは覚えている。北部地方の随伴現象である白夜の最中は、ほとんど暗くなることはなくなり、眠くならなかっ

た。夜7時からゲームを始め、深夜まで遊んだ。しかも遊びをやめた唯一の理由は、仕事で疲れた大人がレナたちの叫声で眠れず、追い散らしたからであった。

小学3年生を終業後に、両親はレナと弟をウクライナ旅行に連れて行った。モスクワ経由で行った。その途中、赤の広場を訪れ、さらに公園にある遊園地で遊んだ。幼いころは、全てを当たり前のように捉えていた。全てを気に入っていた。生活のギャップを感じなかったし、田舎に住んでいることも恥ずかしくなかった。当時流行していた共産マーチのように「我々の国は広く、森林、野原や川が多い。人がこんなに自由に空気を吸える他の国を知らない」。レナの生活もまさにこの通りであった。

翌年、春に両親はレナを1人で乗員2人のヘリコプターに乗せて、地区中心地へ送った。ヘリコプターは地質探査局のものだったので、地質調査者のひざに座っていた。飛行場は川の島にあったため、春に水浸しになり、飛行機はレナたちの村には着陸できなかった。レナは大変しっかりした子であったため、地区中心地で乗り換え、一番近い町へ行き、そこで列車に乗ってアゾフ海まで行った。レナたちの村から数千キロも走った。レナは11歳であった。今の時代、両親は自分の娘を一人でこんなに遠いところへ行かせることはないだろうが、当時犯罪率は低くかった。人々は怒っていなかったし、皆は同じ権利や可能性をもっていた。いずれにしても、そういう風に見え、そういう風に考えさせられていた。

レナは生来冒険心が旺盛であった。5年生になって自分の誕生日に、レナはいかだの旅を計画した。しかも隣の子供たちも誘い込んだ。対岸まで無事に着くことができたが、帰り道では強風が吹いてきた。いかだは少しずつ浸水し始めた。幸いにも岸に大人がいたので、モーター付きの船で救助してくれた。

教師の家族に育ち、レナたちの家族には様々な手当（льготы）が給付された。電気代の支払いを半分にしてもらい、薪は無料でもらった。大河の対岸に土地が与えられ、そこで牛の飼料用に干し草を作った。両親は子供用サーマーキャンプのバウチャーを無料でもらってきた。一方、農民の家庭では事情が違っていた。すなわち、手当も少なく、低い給与しか与えられていなかったから、レナの両親のように自分の子供にそのような生活を確保することができなかった。だからレナは良い生活を送っていたと言える。なぜなら、隣の子供たちは少しでも生計を支えるために両親と一緒にコルホーズの野原へ行って、干し草を作らざるを得なかったからである。

夜に女友達と一緒に映画を観るために、教会を建て直した村のクラブへ行った。最初のテレビは1970年代になってからようやく村に現れた。まだ自分たちがテレビを持っていなかった時、隣家で観た最初のドラマは第二次世界大戦時代のソ連の諜報員についての『春の17の瞬間』であった。

祝日にはコンサートが行われた。当時は、次のような祝日が主要なものであった。11月7日は大十月社会主義革命記念日、3月8日は国際婦人デー、5月1日は国際労働者記念日、5月9日は対ナチドイツ戦勝記念日である。クラブのステージから幸せな少年についての歓喜の歌が響き、社会主義を称賛している詩が読まれた。時折、革命の嵐で苦労していた初期のコムソモール員につい

ての悲しい歌も歌われた。女子団は舞台に立った。レナも彼女たちの間にたち、何か物悲しげに歌った。しかし、彼女たちは歌っていたが、レナは音痴なので口だけを開けていた。その後、よく歌ったと褒められた。村では祭は楽しく行われていた。当時、地方の村には大酒飲みはあまりいなかった。

レナの幼時には、実際に酒飲みは多くはなかった。しかし、1970年代の半ばから村の人はアルコールをより多く飲むようになった。レナたちの家族にもこの不幸がふりかかった。父は酒を飲み始めた。レナは父が大好きだったので、有害な癖と戦い始めた。勝てないことも知らずに、父との関係を悪くしていっただけであった。結局、父は酒に負け、家族の生活水準も下がった。レナは父が酒を飲んでいることを長い間許せなかった。

しかし、人生は続いていった。レナは次第に大きくなっていった。奇麗な服を着たかったが、店では醜い大量消費品以外には、何も無かった。その時から、「ブラット」（裏口）という言葉が現れた。裏口つまりコネクションを利用して、よい物を買うことができた。もしコネクションがなければ、形もない洋服を着るしかなかった。もう一つの方法があったが、それは自分で作ることであった。レナは喜んでそうした。ただ、靴の場合は、そうはいかなかった。レナはとても丁寧に縫い、ディスコへ着て行けるようなイブニングドレスでさえ自分で作った。

ダンスの後、村の道を歩いて、気の向くまま民謡を歌っていた。レナも歌った。できるかぎり頑張った。でもそれより、夜はよく家にいて、読書をしていた。弟はレナより年下なのにとても賢く、何を読めばよいか、いつも彼に相談していた。読書はレナの心を引きつけた。グラスに入れたミルク、暖かいパン、砂糖の塊と本を揃えて、ゆっくりと読書を味わった。その時から冒険にあふれた、素晴しい人生を送りたくなってきた。村から出て、村の皆と違う人生を送りたくなってきた。その時から、ピオネール団との間で問題が生じてきた。馬鹿らしいと思っていた指示に従いたくなかった。整列やうんざりする会議も参加したくなかった。8年生でコムソモールへの加入が許可されなかった。ソ連のシステムの正義を信用していないわけではなかった。当時、ソ連の制度や共産党は存在しなくなるとは全く考えられなかった。加入が許可されない理由は、レナの反乱の態度を抑える教育にあった。しかし、最終的にはコムソモール員になった。なぜならば、ソ連では、青年全員がコムソモールの組織に加入させられていたからである。コムソモール員になれなかった者は大学に進学することはほとんど不可能であった。レナがコムソモール員になったのは、高校卒業直後、すなわち入試の前であった。正式の式典をせずに、普通の行事として行われた。

8年生の時、卒業試験を皆よりよく、そして早く書けた。その後、廊下にいて、できなかった同級生を手伝った。彼らはお手洗いの許可をもらい、レナからできた解答をもらった。

レナたちの学校は8年制学校であったため、隣の村で中等学校を卒業した。国の完全援助下であった寮に住んでいた。1部屋に5〜6人が住んでいた。入寮者は8年制学校しかない村から来た子供たちであった。楽しかった。実家に祝日に帰ったが、道路は絶対的に不足していたため、週末にはめったに帰らなかった。1日3回食事をした。寮ではいつも指導者がいて、規律を確認しながら、

宿題の準備をチェックしていた。学校に行くと両親はいなかったので、同級生と平等であった。女友達もできた。彼女はレナと同様に読書が大好きであった。彼女は数学があまりできなかったので、レナが手伝った。彼女は数学をレンガと壁の関係に見立てて、この壁には一部のレンガが足りないと言っていた。この友達はとても面白い人であった。今は地区中心地の図書館で働いている。2人の素敵な娘がいて、膨大な土地が付いている大きな木造の家に住んでいる。

この学校では大好きな先生が現れ、彼女の愛児となった。この先生は国語としてのロシア語を教えていた。レナのエッセーをクラスの前で読んでくれた。よくお宅に招待され、ピロシキをご馳走してもらった。彼女と彼女の夫は他所から来た人であった。現地の人はとても優しく、思いやりがあったが、2人は寂しく、心を癒される相手がいなかったので、レナは友達代わりになっていた。

レナが書いた「夏の過ごし方」というテーマのエッセーは、先生を感動させた。エッセーのテーマは、9年生を修了後、働いた夏の労働キャンプについてであった。2週間、故郷のコルホーズの野原で干し草作りを手伝った。ある夜に友達と乗馬に行った。残念ながら乗馬ができなかった。労働日の後は馬が立ちながら寝て、結局起こすことができなかった。だが、夏の夜の魅力や、自分の感動をよく伝え、大好きな先生の心を揺るがした。

10年制の中等学校を無事に卒業した。卒業試験もよい成績を残した。そして専門と大学を選ばなければならなくなった。

4．大学1年生

ソ連では学校卒業後、正式に全ての大学への入学に挑戦できた。高等教育は無料であった。だが、実際に農村の学校を卒業して、モスクワとレニングラードという二都の大学に入るには知識が足りなかった。コルホーズの推薦状を利用してモスクワの経済大学へ行くことを勧められた。3つの試験に合格すれば、無選抜[7] вне конкурса で入学できた。だが、第1に会計士や経済学者になりたくなかったし、第2に大学を卒業してから村に戻りコルホーズで自分の専門を活かしながら働かなければならなかった。お母さんの説得に対して、「絶対に行かない」と答えた。「片田舎に住んで農業をするため」。全然違う人生に興味をもっていた。

レナのお母さんはとても優しかった。子供の時、たった1回だけキッチンタオルで叩かれたことがあるくらいだ。子供の中で、レナは一番片意地なところがあった。ということは、兄弟はまったく怒られなかった。お母さんはレナの意志に反対したくなかったし、レナの性格に合う、もっとダイナミックな仕事に就いた方がよいと分かっていた。

村から一番近い町にあった大学の地質学部をお母さんはレナに選んだ。いくつかの理由があった。家族と一緒に暮らしていたお母さんの弟がこの町に住んでいた。すなわち、レナの面倒を見てもらうことができた。そして、この町では地質学より魅力的な専門を見いだすことはできなかった。石

油工業従業員やガス工業従業員が住んでいたこの町は人口が 10 万人であり、石油精製工場に囲まれていた。加工しなかった随伴ガスが燃えた炎は昼も夜も光っていた。1979 年 7 月下旬〜8 月上旬に行われた入学試験を受ける時、大好きな叔父と彼の可愛らしい妻の所に泊めてもらった。試験を準備する代わりに、叔父と一緒に夜に森の中に泊まって、狩りや魚釣りに出かけた。故郷の民族自治連邦構成地域にある大学の入学特権を持っていた。地元先住の非ロシア系少数民族の受験生は全て無選抜入学試験を受けていた。民族自治連邦構成地域では高等教育を受けた非ロシア系少数民族の専門家が必要であった。だから試験に簡単に合格し、大人である学生の生活を送り始めた。

学年の始まりは「ジャガイモ穫り」から始まった。それは、学生たちが国の収穫を手伝う必要があるということを意味し、賃金も少しもらえた。村まで行って、そこに住みながら、約 1 ヶ月間ジャガイモの収穫を行った。大雨が降り続いた。国有地のコルホーズで穫れるジャガイモは小さかった。皆のものでありながら、誰のものでもなく、要するに持ち主のいない経営は大変であった。学生たちは雨に濡れないようにいち早くテントの下に逃げ込み、その結果、ジャガイモの半分は土の中に残されていた。レナはとても腹が立った。農地で育って、収穫がダメになることを見ることが悔しかった。レナはキッチンで仕事を見つけた。秋に自分のジャガイモを収穫すれば喜ぶが、持ち主のいない事業に就き、安い給料をもらうのは全然面白くなかった。だから、キッチンで楽な仕事をすることにした。学生たちは自分で料理を作ったが、コルホーズは材料を提供した。

学生生活にすぐには慣れることができなかった。離れた小さな村で育ったために現れた劣等感はチームの一部になるのを妨げた。その時、恥ずかしがりとなった。奇麗でおしゃれな洋服がなかった。洋服を買ったり、注文したりするためのお金もなかった。簡単に知り合いになる能力も礼儀正しい話をする能力も教わっていなかった。要するに、田舎の女子であった。勉強しなければならなかった科目が気に入らなかったし、全てを理解するための知識が足りなかった。大好きな高校の先生に陽気な手紙を書くと、返事として「がんばれ！」と書かれてきた。最初の何ヶ月間かは、彼女にサポートしてもらっていた。

寮生活は楽しいと思っていた。だが、酒を飲んだり、遊びまくったりしたくなかった。理由はよく覚えてないが、違う学部の寮に引越しをさせられ、そこで美人の友達と出会った。人生はよくなり始めた。だが、学習は相変わらず問題であった。その女友達は 2 度目の 1 年生であり、大学をよくサボっていた。レナと彼女は講義を聴く代わりに映画を観に行き、昼間まで寝坊もした。「奨学金がもらえる程度」と言われていたように、学期試験では「3」ばかりもらった。

奨学金を国からもらっていた。金額は北部地方ではより高かった。レナたちは月々52 ルーブルをもらった。温暖な地方で技師の平均給与は 120 ルーブルであった。だから金持ちの学生と思われていた。両親もサポートした。毎月 30 ルーブルを仕送りしてもらっていた。運が良ければ 1 部屋 2 人、悪ければ 5 人で住んでいた。寮の費用は 15 ルーブルを年に 2 回支払った。学生寮は 5 階建ての建物で、廊下の両側に部屋が並んでいた。お手洗いと流し台は各階にあり、シャワーとランドリーは地下にあった。レナは上述の女友達と 2 人で部屋に住んでいた。彼女はレナに料理の作り方

を教えた。洋服を何も買わなければ、支給されたお金で足り、多くは食事分であった。あとは、映画館へ行ったり、休暇時に実家へ帰ったりするには十分であった。

1学年を修了後、労働訓練をさせられた。レナは地下資源が豊富な大山脈の北にあった水晶地質探査へ派遣された。そこまでヘリコプターに乗って行った。

極めて美しいところであった。二つの山の間に、レナたちのキャンプ場があった。地質探査は大規模なものでなく、五つのテントしかなかった。山では夏の2ヶ月間働いた。8月初旬に初雪が降り出した後、次第にキャンプを片付ける作業に入った。

初めての労働経験がとても気に入った。それに加え、よく稼げた。地球物理学専門家と同行して坂道のルートを歩いて、地磁気探査を手伝った。山の頂上はよく雲で見えなくなった。そのとき、夢のように雲の上を歩いた。霧の中、まだ飛べない小さい野生ガチョウを追いかけた。皆はレナに優しかった。地質学者は特別な人である。レニングラードから来た地質学者は優秀で賢い人であった。

休暇はとても少なかった。晴れれば、水晶の地質探査を続けた。大雨が降った時だけは休みであった。このような休みとなったある日、大雨に降られながら、まだ行ったことない山の傾斜面へ行くことにした。誰にも何も言わずに、レインコートを着て散歩に行った。雨が強かった。計画通りに目的地まで辿り着いた。山の頂上のカラマツの下で座って、子供の時からこの木の大好きな香りを味わいながら嵐を眺めた。だが、下のキャンプでは皆がレナを探していた。心配で皆起きた。

十分に散歩でき、キャンプへ戻ったら、皆は心配でパニック状態に陥っていた。レナに気づいた時、怒られなかったので安心した。しかし、やはり迷惑をかけ、レナはとても恥ずかしかった。

ボーリングしていた労働者のほとんどは「ビッチ БИЧ」であった。ビッチというのはエクス・インテレ・パーソンである。通常、大学卒もしくは博士学位をとっていた人だが、アルコールのせいで仕事も家族も失った人であった。ウオツカを買えない山地ではまた人間らしくなり、面白い仲間となった。1980年にモスクワ・オリンピック大会が開催された時、皆はモスクワの110キロ圏外に追い出された。多くは季節雇用の形で地質調査を手伝いに来ていた。

その年の夏に詩人かつ俳優であるヴィソツキー В. Высоцкий が亡くなった。政府には認められていなかった天才であり、彼の歌はどの家でも聴かれていた。彼のテープは宝物のように人から人へ渡されていった。ラジオで悲しいニュースを聞いた。

夜に焚火の前もしくはオイルランプの前で、また読書した。電灯もあったが、緊急状態にならないかぎり誰も使わなかった。学校資料としては利用が禁止されていたブルガーコフ М.Булгаков や危険な作家であったソルジェニーツィン А. Солженицын の非公式に出版されていた本であった。ロシアの二都すなわちモスクワ、レニングラードのインテリは、田舎者と違う生活をしていた。読んでいた本の意味は全部分かったわけではないが、ソ連で読書禁止とされていた本に触ることができた。

夏休みを実家で過ごした。寮の女友達と一緒に来た。大河の対岸へ行って野生スグリやキノコを

採りに行った。両親は友達をとても気に入った。

稼いだお金を母に渡した。通常は両親が教師であったため、夏休みの終わりには家の金は少なくなっていた。

8月下旬に村から出るのはとても難しかった。夏休みに実家に帰っていた学生は、9月までに大学へ戻らなければならなかった。出かける人や見送る人、大勢岸に立っていた。たまに川船はこの大勢の人を見ても、他の村から出かける人で既に満員になっていたため、我が村に寄らないこともあった。川船は1日に2回来ていた。朝に上流に上り、夜に下流に下った。列車の駅まで辿り着くにはこの船に10時間乗らなければならなかった。

その年の秋はキャプテン室で10時間ほど立っていた。船は混み合っていて立つ場所もなかった。なぜだかキャプテンはレナのことを気に入って、キャプテン室に入らせてくれた。

5．大学2年生、レナの夫

人の記憶は選択的であり、苦労した思い出は直ぐに記憶から消え去ってしまう。最良の思い出だけを残す。だからレナは家族生活について素晴らしい出来事しか覚えていない。

夫に初めて会った時のことをよく覚えている。第一印象はあまりよくなかった。なぜならば、彼についての噂を色々聞いていたからだ。その話の影響を受けて、彼のイメージは最初は悪かった。レナが2年生になってから、同じ部屋に5年生の学生も住んでいた。彼女はお喋りが大好きな人で、レナは彼女の話をよく聞いた。同級生について様々な噂を聞かせてもらったが、なぜだか将来の夫についての悪口がもっとも多かった。

レナは5年生が自分に好意を持っていることが嬉しかった。映画を観に行こうと誘ってもらったし、秋の狩りにも参加させてもらった。週末に一緒にジョッギングもした。花を贈られたり、チョコレートを買ってもらったりした。レナの勉強に協力し、試験やテストでよい点を取った時は、プレゼントをもらった。いつも笑わせてくれた。彼は自分の意志で年下の女の子すなわちレナの面倒をみることにしたが、実は女の罠にかかっていたのであった。1年半後、2人の間に長男が生まれた。

5年生は大学の最終学年であった。「科学的共産主義」という科目の国家試験に合格することは必須であった。そして卒業論文を発表し、合格すれば社会主義労働者の養成が完了した。

大学卒業後、仕事を探す必要はなかった。国家が企業の依頼に従って若い専門家を振り分けた。振り分けは成績・課外活動の評価の順に行われた。北の鉱業都市への振り分けは格が高いと考えられていた。その都市ではよい給与がもらえ、比較的早く国からアパートが支給された。

北の鉱業都市はユニークであった。高緯度で、北極圏内に位置している。都市は永久凍土層上にある。炭坑夫や地質専門家の多い都市であった。この都市は夫の故郷でもあった。人口では連邦構

成地域内で第2の都市で、周辺集落をあわせると約20万人が住んでいた。レニングラード出身の建築家がこの都市を計画したため、レニングラードのイメージを基にしていた。弾圧によって追放された政治犯により建てられた。多くはレニングラードからスターリンの弾圧によってここへ追い出されて来た。

1981年6月に夫はこの鉱業都市の地球物理探査部へ配属された。そこへ行く途中、私の実家に寄り、そこで結婚した。結婚式はささやかに家族と親戚だけで祝った。ウェディングドレスは姉から借りた。村役場で証人の立ち会いの下、婚姻登録をした。

両親はお祝いとしてプーシキン A. C. Пушкин の6巻とゲルツェン A. И. Герцен の6巻を贈ってくれた。持ち帰るのはとても重たかったので、夫は本よりも牛をプレゼントされた方がよかったと冗談を言った。

当時、良書を買うのはとても難しかった。本屋の棚には社会主義指導者の著書ばかりが並んでいた。本の購入は「努力して手に入れるべし」と言われていた。知り合い、つまりネットワークを使って購入するか、長い行列に並んで買うか、郵送の本を注文して何年もかけて待つしかなかった。父の本のコレクションはよいものであり、家族全員の誇りであった。

北の鉱業都市に到着したが、印象はよくなかった。自分の都市が大好きな多くの住人を知っているが、レナはここを結局好きになれなかった。灰色が目立ち、冬が長過ぎる。雪は石炭のダストで黒い。だが、この都市の住民はよい人が多い。北方の位置や、中心から遠く離れていることから影響を受けて、人々の性格はきっと違ってくるものと思われる。人々は思いやりがあり、いつも助け合っている。

1981年7月から夫は地球物理探査部で調査技師として仕事を始めた。彼の任務は石油ボーリングによる地球物理調査であった。長期出張によく出かけていた。初任給は120ルーブルとその金額の50%を北部地域のボーナスとして上乗せしてもらったが、彼は不満だった。この金は家族の生活費、家庭用品の購入、出産準備にも使われた。両親のサポートがなければ、いつの時代でも若い家族は大変である。しかし、レナたちはこの苦難を乗り越えた。近くに同じような若い家族も住んでいた。

レナも地球物理探査部に就職した。大学で2年しか勉強していなかったため、製図の職に就いた。給与は夫の2分1であった。

地質調査者の集落は都市から3km離れたところにあった。レナの職場に隣接する建物にあった探査部の寮で小さい部屋を与えられた。部屋には二つのベッド、一つの洋服ダンス、机と流し台があった。10日に1回奇麗なシーツに交換してもらった。3年後にようやく、都市の中心部に建てられた新築の2DKのアパートを与えられた。当時とすれば、とても早くもらえたと思われた。例えば、夫の同僚は大学卒業後、家族と寮で10年以上住まざるを得なかった。

6．レナの長男

1981年11月にレナ夫妻に長男が誕生した。名前は2人で一緒に決めた。他の候補はなかった。その時レナは20歳であった。家庭や育児についてはまったく準備ができていなかった。だがよいママになった。まだ自分にも幼心も残っていたので、息子といつも友達同士のようであった。産休政策は何回も変わったことを覚えている。長男を妊娠して7ヶ月目から産休をもらった。手当はあまり多くはなかった。そして産後の育児休暇の期間は1年半で、手当として平均給与を支給された。次男の時は妊娠6ヶ月目から産休をとることができ、子供が3歳になるまで育児休暇をとることができ、復帰後の職が確保されていた。

1981年11月中の2日間で、北の鉱業都市の中央産科病院で8人の男児が産まれた。お母さんは皆一つの広い部屋にいて、母乳を与える時だけ赤ん坊を連れてきてもらった。大きな手押し車で運ばれ、白いおむつを着せられ、皆同じ顔をしていた。ナースは片手に3人ずつ赤ちゃんを乗せ、お母さんのところまで運んで来た。赤ちゃんと一緒に過ごす時間はわずかであった。母乳を与えると、ナースは子供を他の場所へ運び、3時間後また連れて来た。これが当たり前のように考えられていた。産後体力を回復させるためなのか、何か別の理由なのか、出産後2日経って初めて赤ちゃんと対面できた。

当時、子供と会えないことをレナはそんなに心配していなかった。なぜならば、他の問題で頭がいっぱいだったからだ。レナの夫は、兵役のためソビエト軍に行かなければならなかった。徴兵制度により、ソ連男性は大学卒業後、軍で1年半兵役の義務を果たさなければならなかった。徴兵期間が終わると幹部の地位が与えられる。夫は11月の決められた日に軍隊へ行かなければならなかった。

レナは生まれた子供と2人だけで、生活費もなく知らないこの都市に残らなければならなかった。誰にも助けを求めなかったが、恐らくとても不安な顔をしていたのだろう。すでに述べたように、北の鉱業都市の住民はとても優しかった。産科病院長は軍事委員部に電話して、夫の入隊延期をお願いしてくれた。当時、1人の子供誕生はその理由とはならなかったはずだが、レナの夫が軍隊へ行かされたのは半年後であった。

北の冬は厳しい。時々気温はマイナス40度以下になった。赤ちゃんとほとんど散歩しなかった。珍しく寒くない日に乳母車を外へ出したが、ほとんど動かずにその場に立っていた。乳母車の車輪は雪に埋もれ、最寄りの店にたどりつくまでに何回も汗をかいた。

コネクションもお金もないレナにとって、子供服を買うことは大変難しかった。子供のものはほぼ全部を、2歳年上の子供のいた姉からそのお下がりをもらった。当時、布おむつや肌着は代々受け継がれた。レナも子供のものを大事にして、2年後に産まれた姪のために姉に返した。

長男はよい子に成長していった。まるまると太って、母乳の匂いがしていた。定期的に小児病院

を訪ねなければならなかった。そこで小児科医は子供を診察して、成長をチェックした。決められた通りにワクチン注射し、検査もしなければならなかった。何かの理由で診察に行けなかった時には、ナースが家を訪れ、レナたちが大丈夫か確認に来た。

レナの家族の最初の冬は、子供の世話と些細なケンカ、そして仲直りの繰り返しで過ぎて行った。レナと5ヶ月になる息子を残して、1982年の春にレナの夫は兵役のため軍隊へ行った。しかし、レナは泣かなかったし、頑張った。けれど、どれだけレナにとって辛い状況だったかは、それまで息子には母乳しか与えていなかったのに、1日で母乳が出なくなったという事実が表していた。レナの夫は、いつもマイホームパパだった。当時、できる限りレナに仕送りをした。さらには、精神面でも助けようと努力した。いつも冗談を言っては、レナを笑わせた。入隊後、初めての手紙には、「レナちゃん、軍隊では、足の毛深い人には冬に防寒長靴をくれないんだ。だから僕は普通のブーツで過ごさなければならないんだよ。」と書いてあった。

6月になり、レナの生まれ故郷の大河で運航が始まるとすぐ、レナの父は、レナと長男が夏の間実家で過ごせるように迎えにきた。先ず夜行列車に乗り、それから10時間船に揺られた。当時のソ連には紙おむつがなかった。レナはどのようにそれをやり過ごしたかを覚えていない。たぶん全てがうまくいっていたのだろう。レナは、2年前にちょうど同じルートで3ヶ月の息子を連れて、夫の元へ向かっていた同級生に会ったことを思い出した。彼女の夫は、トナカイの飼育に従事していて、ツンドラにいた。彼女は乳飲み子と「チウム[8)]」に住むつもりだった。彼女に比べたら、レナはましな方であった。実家では両親が助けてくれた。レナの父は孫を大変可愛がり、よく子守りをしてくれた。レナの母も時間のある限り、孫の世話をかってでてくれ、レナが家事から解放されて半日ゆっくり休めるように森へ行かせてくれた。

レナは、森で息子のためにベリーを採った。息子はそれを小さな手で自分の口へ運んだ。彼は何でも口に入れる子だった。ある時、どこからかマッチ棒を見つけ、もちろん口の中に突っ込んだ。マッチ棒は見事に口に挟まり、息ができなくなった。レナは全く驚かず、自分の指で息子の口からマッチ棒を引っ掻き出した。レナの母は、その一部始終を見て気を失いそうになった。いろいろな出来事があり、常に忙しかった。

レナの夫は頻繁に手紙を書いた。それだけでなく小包も送ってきた。普通は、両親や妻が、従事している兵隊に貴重な食料品を小包で送っていたが、レナの家庭では逆だった。夫は現金を小包に忍ばせて送ってくれた。レナが最初の小包を開けた時、100枚の1ルーブル札が飛び出てきた。彼女は大変驚き、どこからこのお金が出てきたのか不安になった。100ルーブルというのは、当時の農村の平均月給であった。基地で写真を撮る仕事を命ぜられ、仕事のかたわらお小遣い稼ぎもしたということだった。彼の稼ぎは写真1枚につき1ルーブルであった。軍隊において兵士は国家から援助されていたので、個人で出費する必要はなかった。それで、レナの夫は全てのお金を妻と息子のために送ったのだった。このようにしてレナの夫は軍隊からでも家族を養った。

7．ハネムーン

レナは子供の世話をするために、大学を休学した。レナは1982年9月に3年生になった。その前に、夫に会うために彼女は軍隊基地へ行った。彼女の夫は極東の中国との国境に面している場所で従事していた。レナの住んでいるところから数千キロも離れていた。レナは息子を両親に預けた。夫と一緒に2日間過ごすために、彼女は1週間かけて列車で行った。その途中で、何冊もの本が書けるほど多くの話を聞いた[9)]。バイカル湖に沿って列車に揺られ、レナはその湖を眺めていた。シベリアの円形の小山は秋の装いでとても奇麗で感動した。息子と離ればなれになり大変寂しかった。帰り道は飛行機で帰った。

新学期になり、息子を抱えての寮生活は大変なものであった。レナの母は、娘を助けるために、自らは教師を退職してやってきた。レナの母は、大好きだった仕事を辞めたのだ。彼女にとって自分の生まれ育った故郷を離れることは、いつも辛かった。その時、家の仕事を全て放り出し、1ヶ月近くレナ達と寮で過ごした。冬の試験の時、孫を連れて故郷に帰った。

1982年11月7日[10)]は、セレモニーも何も無かった。共産党書記長のブレジネフが危篤であったからである。通りでは警察がパトロールをして、誰も騒がないように監視した。全国民は様子をみていた。皆は、あまり上手に話のできないような老人がこれ以上国を操ることはできないことに気づいていた。政治局員は、全員年寄りであった。その中から候補を選ぶことは難しかった。11月10日にブレジネフ氏は亡くなった。新しい共産党書記長がまた老人になったので、国民は落胆した。国全体は混乱していた。食料品店はいつも大行列だった。肉、牛乳、ソーセージ、その他の食料品も入荷しても直ぐに完売となり、棚から消えた。

レナと息子はその後もなんとか生き抜いた。春になり、レナは自分にとって大学の勉強より息子が大切だと分かった。そして、また1年間休学した。大学労働組合がレナと息子に黒海に面しているソチへの旅行バウチャーをくれた。当時、旅行ツアーはほとんど買えなかった。ソ連には二つの独占的な旅行会社しかなかった。一つはソ連国内旅行を扱う「スプートニック」、もう一つは外国人の受け入れを専門的に行っていた「インツーリスト」であった。ほとんど全ての旅行ツアーは労働組合を通して配給された。

レナの息子はよく病気になった。彼の免疫力を高めるために、冬の間、寒い雪国から暖かい春の黒海へ避寒した。最初は旅行ツアーで訪れたが、その後3ヶ月間は部屋を借りて過ごした。大家は素晴らしく、レナと息子に親戚のように接し、安く部屋を貸してくれた。とても美味しいボルシチを作って、食べさせてくれた。この優しい女性の人生は波乱に満ちていた。彼女はギリシャ人であったため、スターリンの弾圧により、シベリアへ送られた。彼女の家族は出発の準備をするのに2時間しか与えられず、過酷な列車に乗せられ、故郷から追い出された。しかし、怒りっぽい人にならなかった。微笑みは優しく、大人しい性格だった。レナにはそこがとても住みやすかった。

ソチは驚く程奇麗な町であった。大いに散歩した。赤ちゃんは元気になって、日焼けした。レナも休めた。夫の送金が底をつくと、結婚指輪を売った。しかし、子供の健康は金には替えられない。彼の幸せな笑い声は何よりも貴重だった。当時、レナたちは楽しかった。夫は1ヶ月間の休暇を与えられ、一緒にソチで過ごした。この1ヶ月は結婚後なかったレナと夫のハネムーンとなった。時々、大家は子供の世話をしてくれ、レナと夫は2人きりになることができた。2人で海岸通りを歩き、夜の星空を眺めながら、かすかな海風に吹かれていた。とても幸せだった。

8．テンシャン登山

残りの夏は、レナと息子は両親のいる田舎で過ごした。夫の兵役はあと半年残っていた。その夏の1ヶ月間、レナは、昼は幼稚園で働き、夜は郵便局の床を磨いた。時間はあっという間に過ぎた。夫が帰る前に、レナは息子と北の鉱業都市の寮に帰った。夫はよいプレゼントを持って帰ってきた。最後の1ヶ月間、彼はモンゴルで従軍し、そこで当時ロシアでは不足していたプレゼントを買ってきた。

職を失わないために、レナは仕事をし始めなければならなかった。すでに地質専門家の職に就いていた。息子のための幼稚園は確保できなかった。そのためよく有給休暇を取り、息子と家で過ごした。この有給休暇は、子供が病気になった場合、際限なく与えられ、その間は平均給与が与えられた。息子は頻繁に病気になったので、あまり長いこと仕事ができなかった。

大学は、通信教育に変更した。年に2度試験を受けなければならず、勉強は自宅で行った。夫は、よく出張でフィールドへ出かけた。その冬をどのようにして乗り越えたかは覚えていない。おそらく、辛い思い出は脳裏に記憶されなかったのであろう。

冬の試験の時、息子を両親の実家へ預けた。息子は祖父母のもとで2ヶ月を過ごした。レナの両親はその後も孫を預かると申し出たが、夫は息子を迎えに行き、家に連れて帰った。

その冬はとても寒く、ようやく北の鉱業都市に春が訪れたのは6月になってからだった。5月の初めは川に厚い氷が張っていた。

北部地方は休暇の期間が長く、さらにその期間中も平均給与が支給されていた。地質関係の仕事に就いている人は2ヶ月間、炭坑夫は3ヶ月間の有給休暇が与えられた。たいていの人は、この都市から離れ、南へ行こうとした。夏の間、この都市から出ることは大変難しかった。飛行機の切符を購入するには、45日前の朝5時からすでに行列ができていた。窓口は9時からしか開かなかった。鉄道の窓口も同じような状況であった。飛行機の切符は給料と比較するとそれほど高くはなかったが、飛行機の便数は大変少なかった。列車の切符はもっと安かったが、やはり本数はとても少なかった。それでも、遠くへ行く人はなんとか切符を手に入れた。もちろんコネクションを持っている人もいた。

北部地方に住む人は、暖かい地域へ行けるこの長い休暇を楽しみにしていた。レナの家族の記憶は夏の旅ばかりが思い出される。

1984年8月に10日間、テンシャン山脈の登山をした。息子はまだ小さかったため、両親のところへ預けた。

モスクワからアルマータ[11]までの飛行機のチケットは買えなかった。そのため列車で4日間もかけてそこまで行った。一つのセクションに6席ある座席指定寝台列車は、満員だった。この鉄道は砂漠を通過していた。炎天下で車両の中の気温は50℃にまで達することがあった。言葉で表せない程、蒸し暑かった。同じ車両に妊婦がいたが、彼女は気分が悪くなった。帰りも同じルートにならないように、アルマータで1泊し、翌朝飛行機の切符を購入した。

レナたちのグループは5人で、海抜3,500mまで登った。レナは一生懸命登ったが、全ての荷物は夫に預けた。氷河には深い穴があり、そこを渡ることが一番怖かった。夜はとても寒く、地面は固かった。レナは、いつになったら夫が起き、自分の寝袋を私にかけてくれるのかと一晩中思っていた。ソ連時代のアウトドア用品は質が悪かった。テント、リュックザック、寝袋は重かった。ブーツは下山途中には駄目になった。アウトドア用品の専門店はなかった。「スポーツ用品店」では何が売られていたかというと、祖末で使い勝手が悪いものだった。食料品に関しても問題だらけだった。店では軽量包装の食料品がなかった。全てが金属製の缶かビンであった。レナたちはこの10日間ずっとラスクとお粥で過ごした。下山した頃には、レナの母がレナの夫に「2度と私の娘をこのような登山に連れて行かないで」と言う程、やせ細った。しかし、レナにはこの旅が気に入っていた。

下山後、アルマータの近くにあるカプチャガイ人工貯水池[12]へ疲れを取るために向かった。そこで魚を釣ったり、泳いだりして、登山の疲れをとった。レナたちのテントは水から2mのところに張られていた。ある晩、網にかかった大きな魚がレナの夫を驚かせた。彼は捕まえた魚の大きな頭を見るなり叫び声をあげたので、レナは笑った。それまでレナにとって夫は「スーパーマン」であったのに、魚で叫び声をあげたのだから。今でもレナは当時のことを思い出すと笑ってしまう。

レナ夫妻にとって2度目となるこの休暇はとても楽しいものであった。彼女たちは奇麗なアルバムを作り、友人に見せている。アルバムの写真はレナの夫が、新居のアパートの風呂場で現像したものだ。

9．新居

1984年の秋、レナ家族は都市の中心部にある新築の2Kのアパートへ引っ越した。新居は8階にあり、広さは57㎡で二つの部屋と台所があった。窓からの景色は最高で、周りにある建物は5階建てのため、見渡す限りツンドラが広がっていた。

レナは、長い間、若い夫婦から夫を奪ったソ連の兵役システムを憎んでいた。彼女は、夫が軍隊で書類を作成したり、くだらない事務作業で無駄に時間を過ごしていたと考えていた。その間レナは幼子と生きて行くために必死で、大変辛い思いをしていた。しかし、軍隊での経験は役に立った。なぜならそのお陰でアパートが支給されるリストに入れたからである。レナたちと同期の地球物理探査部の若い専門家はその後も長い間寮に住んでいた。

新居は、地球物理探査部員のために建てられたものだったので、隣人は全て職場の知り合いだった。皆仲良く住んでいた。お互いに家を訪れた。時々、買い物に行く時間が無い時は、砂糖や塩を隣人からもらった。レナは隣人の子供に勉強を教える代わりに、息子の子守りをしてもらった。一つ下の7階の住人は、パイを焼くのがとても上手で、よく御馳走してもらった。9階の住人は料理の美味しい作り方を教えてくれた。新年に皆のところを回り、挨拶をした。皆と仲良く住んでいた。アパートは暖かかったが、大吹雪の時に、東に面していた全部で三つの窓に風が吹きつけると、とても寒くなった。

息子の3歳の誕生日は、引っ越し後に祝った。家具は、ソリと幼児用ベッドしかなかった。家具店には何も売っていなかった。近隣の炭坑集落へ行き、探してみることを勧められた。そこで、ソファーベッドと2脚の椅子と台所の家具をローンで購入した。利子無しのローンを職場で1〜5年の契約で組むことができ、返済は給料から天引きされるシステムになっていた。

夫は、子供部屋に息子が登って遊べる遊戯を設置した。息子はぽっちゃりして不器用な子だった。ある日、両親の知らぬ間に天井まで登り、1人で降りることができずに泣きながら助けを求めた。息子はどちらかと言えば静かなゲームが好きだった。彼はソファーのクッションで家を造り、そこで絵を描いたり、粘土で遊んだ。とても穏やかでよい子だった。

幼稚園に入学させることはほとんど不可能であった。幼稚園に空きがないために、多くの知人は、違う町に住む両親のところへ子供を預けていた。休暇の時にだけ子供と会うことができた。

レナの夫は、息子が入園できるように、道を挟んで向かいにあった幼稚園の園長にお願いをしに行った。入学を許可する代わりに彼はホールのデザインをすることを園長に申し出た。様々な行事が行われるホールの壁に、愛国心を駆り立てるスローガンを書いたり、奇麗な絵を描いた。

しかし、病気がちなため息子はあまり幼稚園に通うことができなかった。よく欠席をしては家に残っていたが、あまり手はかからなかった。たまに納得がいくまで3時間もかけて粘土でウサギや鴨を作った。レナにとってはそれが普通だと思っていたが、幼稚園で働いていた彼女の姉は、それほど粘り強い子は滅多にいないと驚いた。レナの息子にはアパートの方が寮と比べて暖かく住みやすかった。

1985年の新年を家族と一緒に祝った。息子は新年の直前に水疱瘡にかかった。他の人にうつさないために誰も招待しなかった。夫の独身の友達だけと一緒に祝った。

息子は全身に薬を塗られ、緑の斑点だらけになった。両親は、息子がサンタクロースや友達と一緒にツリーの下で踊れないことを寂しく思わないように、息子の手に緑色のツリー、お腹には雪だ

るまの絵を描いた。それからレナの夫はヒゲを付け、サンタクロースに変身をして息子にプレゼントを渡した。そのあと、息子はお父さんに興奮しながらサンタクロースからプレゼントをもらったことを話した。

10. 1985年、息子との別居

1985年4月に、2週間のツアーが支給され、カフカス山麓の黒海に面した保養施設へ行った。レナ家族は旅行代金のたった10%だけを支払えばよかった。オフシーズンだったので、支給された。夏期にこのような旅行をもらうには、労働組合に知り合いがいる場合を除いて、数年間待たなくてはならなかった。

ソ連時代の保養施設はどれも同じようなものであった。各階ごとにトイレがあるタイプ、各部屋にトイレがあるタイプ、もしくは夏限定のログハウスタイプのどれかであった。たいていの場合敷地は広く、食堂、ダンスホール、管理所があった。冬はオフシーズンのため退職者がそこで休んでいた。夏は、社会主義労働勤労者が休むことができた。

保養施設で休むことは、特権と考えられていたし、個人旅行より格段に安かった。

2ヶ月間の休暇の全てを黒海のそばで過ごした。ツアー後、クリム半島にあるアルシュタへ船で行った。この地は、風邪を引きやすい人や肺疾患の人の治療によいと勧められたからである。

息子はクリムで初めて登山を経験した。レナ一家は近くの山に日帰りで登った。それからテントを持って森の湖畔で泊まったりした。毎日海で泳いだ。

南の保養地で5月、6月初めに部屋を借りるのはさほど高くなかった。そのお陰で帰りの飛行機のチケットを買うお金もできた。

この休暇で息子の免疫力は高まったと思われたが、自宅に戻るとすぐに病気になった。小児病院で、ロシアの中緯度地域にある療養所に息子を送ってはどうかと勧められた。トゥーラの近くの松林に北の鉱業都市の子供専用療養所があった。療養期間は6ヶ月であった。旅費や食費などあらゆる出費はこの都市の石炭会社の労働組合が払ってくれた。レナは1人で決断をしなければならなかった。夫は休暇の後にすぐ長期出張に出掛けていた。夫と連絡をとる手段は無線だけであった。

レナは遠く離れたまったく知らないところへ息子を送りたくはなかった。しかし、この北の鉱業都市で病気になった。これもレナがこの都市を好きになれなかった理由の一つであった。

3ヶ月だけ息子と離れて暮らすことは我慢できた。夫は長期出張中は、休日返上で働いていたため帰宅後その分の休暇が与えられた。これを利用し、レナと夫は飛行機でモスクワまで行き、そこから電車で療養所まで息子を迎えに行った。ちょうど息子の誕生日であった。久しぶりに会った息子はとても健康的で、頬は赤かった。息子は両親に松林で最も好きな場所を見せた。彼は両親のために松ぼっくりを集め、とても幸せな顔をしていた。息子の健康のために、夫はレナに息子をあと

3ヶ月保養所に残すように説得した。

11. 1986～1987年、退職

1986年に療養所から子供を列車で北の鉱業都市まで連れて行った。レナの息子は車両から出るとすぐに、冷気の影響で息苦しくなった。最初の2日間、両親は息子の規範的行動に驚かされた。とても丁寧に自分の洋服を椅子に掛けた。恐らく療養所で厳しく躾けられたのだろう。ただ彼は直ぐにそれを忘れてしまった。

息子はよく風邪を引いたため、レナは多くの時間を一緒に過ごした。息子に本を読み聞かせた。自分が面白かった本を読んだので、2人は満足していた。息子は父の軍隊服を着るのが好きだった。兵隊の帽子とベルトは彼の大好きなおもちゃだった。レコードを回し、物語を聞くのも好きだった。店にはおもちゃが少なく、面白くなかった。夫はモスクワやレニングラードへ出張しては、奇麗で高価なおもちゃを持ってきた。地方より大都市の方では物の供給はよかった。ソーセージを買うためにモスクワまで出掛けた人もいた。例えば、500kmも離れた都市から出るモスクワ行きの夜行列車は「ソーセージ列車」と呼ばれていた。これに乗って主に食料品を買うためにモスクワへ出掛けた。この年は、レナにとって生涯の親友ができた記念の年であった。レナは、このような友達を幼少時代から夢見ていた。彼女が大学で一緒に聴講し勉強した仲間だった。冬の試験の時、彼女と一緒に同じ部屋で寝泊まりをした。昼間はテストや試験を受け、夜中彼女とおしゃべりをした。彼女が面白い小話をするので、レナはお腹が痛くなるまで笑った。友達は六つ年上だった。当時、3人の子供を育てていた。彼女の人生は平坦ではなかったが、ユーモアのセンスがあった。

春にチェルノブイリの事故が起こった。その時、レナは冬の大学試験を受けていた。とても怖かった。皆は原子力発電所の近くに住んでいた人のことを心配した。ある学生は子供をウクライナの両親に預けていたので、ずっと泣いていた。

マスコミは全ての真実を伝えなかった。皆に落ち着けとした。黒海で休んでも危なくないと言われた。信じるしかなかった。保養所はほとんど全て黒海地域、特にクリム半島に集中していた。ソ連人はより暖かい外国の海へ出かけることは不可能であった。

1986年の夏にレナの夫はクリム半島にあった子供用夏キャンプで子供たちの世話をして働いた。レナと息子は側にいた。北の鉱業都市の地球物理探査部は探査員の子供のためにこのキャンプを用意した。夏の2ヶ月間寄宿学校の建物を借りた。そこで働くスタッフは皆探査員だった。一番よい仕事は掃除と海でのライフガードであった。たった3時間だけ働けば後は自由になれたからである。子供の世話をする仕事は大変で、24時間であったため、レナは子供を連れて夫と一緒に行くのを許された。給料には北部地方のボーナスもついた。だからレナの家族は、その夏に子供のリハビリをしながら、金も稼げた。

この夏のキャンプはレナの家族のためになっただけではない。スタッフ皆自家製ジャムや缶詰を作っていた。台所へアクセスできた人はこっそり野菜やフルーツをもらった。当時、レストランや食堂から食物をもらうことを当たり前のように捉えていた。「社会主義の餌箱」にアクセスできない人は市場で買うしかなかった。と言っても、南の地方では全部安かった。レナもレナの夫と沢山のフルーツを買って、ジャムを作った。とても時間がかかったが、美味しいジャムが作れた。

夏キャンプのスタッフが全部の瓶を列車の中に積み込んでみたら、子供が見えなくなるくらい大量であった。旅に出ると沢山のスーツケース、箱、袋を運ばなければならなかった。それは実際に社会主義下における生活の一部であった。

夜によく散歩にでかけた。レナは暗く暖かい南の夏の夜が好きであった。ある時、レナの夫はハリネズミをみつけた。子供に見せるために持って行き、結局彼のペットとなって、北の鉱業都市まで連れていってしまった。ハリネズミは夜になるととてもアクティブになった。レナは家族と一緒に実家へ帰った時に近所の人に預けていたが、近所の人はあまりにもうるさく、我慢できなかったので、幼稚園にハリネズミを渡した。

秋にレナは初めて子供を4時間も1人で留守番させた。トマトとピーマンを買うために長い行列に並んでいたからだあった。とても心配だった。子供は1人だったし、野菜も足りないかもしれないのに、わざわざ行列に並んでいるので心配であった。とても寒かった。この辛い経験は一生忘れられないことになった。その時から並ばないようにした。だが、皆はとても寒い日でも外で食器、家具、食料品などを買うために行列を作った。何でも不足していた物を買うために何時間もの行列は大変だった。レナは行列に並ぶより、ものが無い方がましだと決心した。

レナは仕事場まで歩いた。凍った川を渡って近道で行くと3kmであった。バスは5kmも走った。冷たいバスはいつもいっぱいで、ただ立っているのはとても寒かったので、歩いた方が気持ちがよかった。しかし、噂や喧嘩だらけの女性チームで働くのは好きではなかった。つまらないフィールドデータ処理をして悲しい思いをした。レナは人生を無駄にしていると思った。

1987年に大学をようやく卒業できた。5年の代わりに8年もかかった。当時、とても長いと思っていたが、まだ一生勉強ということが分からなかった。当時は、やはり家族が第一であった。

1987年の夏をまた黒海で過ごした。残念なことに350ルーブルも財布から盗まれた。店で子供におもちゃを買っていた時、後ろから鞄に穴を開けられ、財布を丸ごと取られてしまった。あまりにも大きなショックであったが、「中緯度地域の3ヶ月の給与」を支給されていたため、夫には怒られなかった。

8月に家の近くにあった山へ出掛けた。子供は5歳になって、大人と同じように文句もいわずにたくさん歩いた。毎朝焚火も用意してくれた。

秋にレナは昇進がなかったので、上司と喧嘩をして仕事を辞めた。

12. 1988 年、新しい仕事

仕事を失いレナはとても不安になった。家にずっといて家事をするのは退屈だったし、当時女性が夫の給料で養ってもらうのはよいこととは考えられていなかった。そのためレナは鉱業都市内の地質関係組織を回り仕事を探した。給料の高い仕事を紹介してくれる影響力を持った知り合いはなかった。就職活動中に偶然ピオネール宮殿[13]に立ち寄った。レナはそこで自分を売り込み、彼らは喜んでレナを雇うことにした。そこでは「若い地質学者」サークルの指導者を求めていた。その時から、レナの仕事は完全に自分の思い通りになった。登山、旅行、様々な人との出会い。毎日が忙しくなった。

以前レナが地球物理探査部で働いていた時は、何よりも勤務ダイヤが嫌だった。仕事が無い時期でも、全員職場に来て 8 時間デスクに座っていなければならなかった。窓から外を眺め、面白い人生はレナの横を通り過ぎていると感じた。新しい仕事によって行動の自由が与えられた。働く時間を自分で決めた。ツアーであっても、室内授業であっても、彼女に一任されていた。この自由こそ望んでいたものだった。

熱心に働き始めた。レナは地元の地質関係企業の広報部で働いていた人と知り合いになった。彼らは計画立案やスポンサーとして積極的に参加していた。「若い地質学者」サークルは北の鉱業都市で初めて設立された。子供たちはそこで地質学やアウトドアツーリズムの基本を無料で学ぶことができた。ソ連では校外教育施設は完全無料であった。このサークルに来た子供たちは主に地質学者の子供であった。子供たちはレナのようにとても熱心であった。9 月〜5 月までに鉱物資源が豊富な大山脈、「地質学の都」であったスベルドロフスク（現エカテリンブルク）へ行き、鉱物を収集した。夏にウクライナのポルタヴァ[14]へ行った。全ての経費を地質関係企業の労働組合が負担した。レナが代表責任者に金銭援助を求めに行った時も、だれもレナに反対しなかった。将来の地質学者のための援助要請だったからである。

サークルの子供たちの親は長旅に反対しなかった。当時、ソ連の治安はよかった。レナの夫も全ての長旅に同行した。自費休暇や振替休暇を取って、ソ連の旅を息子や子供たちと仲良くした。息子は幼稚園の年長だったが、年上の子供と接していたため、成長が早かった。遠足生活に皆と同じように耐えられた。

1988 年に夫は昇進した。ボーリングによる地球物理探査部の技術長となった。その時から、仕事が増えて、レナと毎回一緒に行くことができなくなった。給料も増えた。レナは初めて毛皮のコートを買ってもらった。レナの給料は低かった。ソ連では教師の給与は大変低かった。レナは教師の家族で育ち、お金が一番重要なものではないと学んだ。仕事はとても気に入っていたし、家族を十分養えるほど稼いでいた夫も側にいた。

地質関係企業の組合はポルタヴァへの 15 人分の無料旅行ツアーを支給してくれた。レナの夫は全日程に渡って参加できなかったので、後半だけ来た。親しい人に側にいてもらうために、レナは

そこの夏キャンプで彼女の友達を雇うようキャンプ長と交渉した。友達も姉も他所に住んでいたが、キャンプ長は賛成してくれた。今から考えるとあり得ないことであるが、彼女の推薦だけで面接もせず、よく雇ってくれた。

ポルタヴァの公園、庭園、親切な人々がレナを感動させた。人々はとても思いやりがあった。ポルタヴァ地域への遠足を計画中に、面白くお金に無欲な人々と出会った。彼らは、若い地質学者にとって興味のあるルートをレナに教えてくれたり、案内してくれた。夏の間レナと子供たちは130km も歩いた。旅の最後には毎回小川を見つけては皆で泳いだ。

さらにポルタヴァで、レナは考古学者と出会い、彼らはレナ達をスキタイ人の古墳発掘地に招待した。考古学者のキャンプはクレメンチュク貯水池[15]の近くにあった。丸一週間レナたち一行はこのキャンプで生活をした。無料でテントと食事を提供してもらった。昼間は発掘に出掛け、夜は焚火の近くで休んだ。テントのロープには沢山の奇麗なトンボが羽を休めていた。北方から来たレナ達にとって全てが夢のようだった。

13. 息子の入学

毎年休暇の終わり頃、南の地域から帰る途中で実家に寄った。その年、レナの誕生日を実家で祝ったため、息子は入学式に間に合わなかった。息子は直ぐにクラスのリーダーになった。自分で熱心に宿題をした。

息子の教育は実験的であった。当時、ソ連で初めて設立されたギムナジア[16]に通っていた。教育は無料であったが、両親は自発的に寄付をした。寄付のおかげで、1 クラスの生徒数は少なかった。生徒はいつでも面倒を見てもらえていた。放課後、特別教員と外で散歩したり、興味のあるサークルで活動した。

一般的な学校では、時々1 クラス 1 人の教員に対して生徒が 40 人もいた。放課後、直ぐに帰宅した。レナと夫は息子にこのような学校で勉強させたくなかった。入学前に面接を受け、ギムナジアに入学できた。ギムナジアの建物として一般学校に付属している建物が使われた。レナの家のすぐ近くにあった。

初年度、レナの息子はダンスのサークルに入った。最初は、あまり行きたくなかったが、直ぐに慣れて、10 年生まで週 5 回も通った。

息子のハードスケジュールのせいで、授業期間中（9 月～5 月）、レナは遠足にあまり出掛けることができなくなった。息子の世話をした。学校までの送迎をした。夜のサークルにも送った。レナの夫はこの冬、大変忙しかった。ソ連共産党員ではなかったが、昇進するために、共産党学校を卒業しなければならなかった。学校は都市の中心に位置していた。様々なコースがあったが、内容は社会主義のプロパガンダであった。

春休みに鉱産資源が豊富な大山脈の登山へ出掛けた。キャタピラ・オフロード車に乗せられ、金鉱を開発していた地質キャンプへ連れられて行った。ログハウスに泊まり、毎日スキーをした。都市の石炭ダストまみれの空気と比べると、そこの空気は甘く奇麗であり、この空気を味わった。

1989年4月にレナのサークルの子供たちは、レニングラードで開催された全ロシア地質学コンクールに参加した。北の鉱業都市はまだ雪が高く積もっていたが、レニングラードは春雨が降っていた。レナは初めてレニングラードを訪れ、興味をもった。無数の観光ツアーに参加した。夫も同行し、とても安心できた。いつか息子が首都の大学に入学できるようにと夢みた。

夫はこの年の夏休暇は仕事が忙しく、レナたちと一緒に過ごせなかった。

14. ウズベキスタンとタジキスタン

6月にレナは息子とタジキスタンへ行った。レナの友達が彼女の夫の故郷へ誘ってくれたのであった。タジキスタンはソ連邦構成共和国の一つであった。そこの生活はロシアでの生活と全く異なっていた。物乞いをしている貧しい人をそこで初めて見た。若いタジク人の女性は乳児を抱えて、真夏の昼間、道に座って物乞いをしていた。レナはこれを見て、ショックを受けた。ソ連には乞食はいないと思っていた。なぜならば、内戦の時に犠牲になった人々は、乞食や奴隷が生まれないように戦った、と学んだからである。

友達の夫はレナたちをタジキスタンの色々な村落へ連れて行き、彼の親戚を紹介した。そこで、コルホーズ畑で苦労したため老人のようにみえる、若い女性たちと会った。全ての村落は貧しかった。子供も汚れた服を着て、食べ物を乞うた。男性は日陰で一日中お茶を飲み休んでいたが、女性は一所懸命働いていた。このような男女不平等をレナは初めて見た。あまりの驚きにレナの目は大きく開いたままだった。

友達と彼女の夫の無数の親戚を巡りながら、よく旅をした。ある時、軽自動車にぎゅうぎゅう詰めで8人乗り、山脈の山道を越え、タジキスタンからウズベキスタンへ行った。その時、海抜3,300mまでも登った。いつも素晴らしいもてなしを受けた。美味しいピラフを作ってくれ、バックギャモン（西洋すごろく）を教えてくれた。

レナの息子はこの地の気候には耐え難しく、ほとんど食欲がなかった。旅はとても面白く、知らない文化に触れたが、あまりにも違うため、モスクワへ帰って白樺を見てホッとした。この旅から、レナの頭の中のペレストロイカが始まった。社会主義の裏側を見てしまい、衝撃を受けた。レナが住んでいたところでは、色々な物が不足しており、多くの人は行列に並んで生活を送っていたが、乞食がいなかった。タジキスタンで、ロシア人はソ連共和国の占領者だと初めて聞いた。

15. タイガ

レナは、休暇の残りを実家から30km離れたタイガで過ごした。原始人のように10日間森の中の小屋で幸せな野生生活を送った。この年、キノコがたくさん採れ、親戚のために何年間分も乾燥キノコを作った。塩漬けが間に合わないほどたくさんの魚を釣った。息子は蚊に刺されないように10日間も顔を洗わなかった。村に戻った時、あまりの汚さに姉は驚いた。

秋に極限の旅をした。週末に北の鉱業都市から100kmも離れたツンドラへ列車で行った。真っ暗闇の中で知らないところを歩いた後、ゴムボートで激流の川を下った。レナはとても怖かった。帰り道は列車の切符もなく、石炭を運ぶオープンコンテーナーに乗った。雨にも降られながら、石炭で汚くなったが、何とか町まで帰ることができた。

レナの夫はこの年に地球物理探査部で地質探査管理長となり、部下の人数は110人となった。とてもよいポストに就いたが、しばらくしてから国が大きく揺れ、ソ連は市場メカニズムを導入し始めた。国家援助を受けていた業種は、援助の許可が下りず、夫の仕事の価値はなくなった。

16. 初の外国旅行

全国では、石けん、砂糖、小麦粉等の日常生活品に交換できるクーポンが出回った。職場では給料と共にクーポンが支給された。このクーポンは、大行列に並んで物と交換することが可能だった。レナはこのクーポン制度の仕組みがよく理解できていなかったため、行列には並ばなかった。他の専門職と比べると地質関係の職場では、物資の供給がよく、夫は行列に並ばずに食料品などを手に入れることができた。袋ごと、箱ごと食料品を持ち帰った。レナにとってあまり嬉しいことではなかった。なぜならばアパートが小さかったため置く場所がなかったからである。レナは頻繁に知り合いにお裾分けした。

この時、バーターという言葉が現れた。6月に炭坑夫がストライキを起こしてから、彼らは給与として電化製品と交換できるクーポンをもらうようになった。初めてビデオ上映所が現れた。普通はこのような場所は共産党の秘書が作っていた。彼らは政治に近く、この都市にあった遊休施設を借りることができた。こうして共産党員は経営者となった。予算のあるうちに喫茶店の建設も始まった。

テレビで議員の討論が放送された。皆は積極的に政府の変化について議論した。だが、レナは政治に興味がなかった。夫はよい給料をもらい、2人目の子供について真剣に考えていた。

「鉄のカーテン」が少しずつ開いた。社会主義国家へのバスツアーが組織された。1989年12月にレナは夫と共にポーランドに行った。外国へ行くためのパスポートもなかった。バスのグループ全員分のビザをもらった。ポーランドへ行くには、貴金属とウオツカとカメラを携行することを勧

められた。ソ連では貴金属が大変安かったが、普通の店で買うのは不可能であった。貴金属は、結婚する人のための店で、クーポンと交換することができた。レナの夫は、どこからかこのクーポンを手に入れ、その店で指輪と交換した。ポーランドについてから、市場でこの指輪を売ろうとした。指輪は紐に通して両手で持っていた。レナは少し離れたところからその光景を見ながら笑っていた。夫にとって物を売るのは初めての経験であった。レナは、物を売るのはとても恥ずかしかった。

売って得たお金で、防寒コートを二つ買い、息子にはソ連には全く無かったチューイングガムを買った。その間息子は、違う町に住む姉のところに預けられていた。彼は2年生だったが、学校を休まざるを得なかった。自分で毎日先生に言われた通りに勉強した。親戚は皆、8歳のレナの息子が自主的に勉強していることに感心していた。

学校での成績がよかったので、レナの息子はオクチャブリャータの入隊式で、旗手を務めた。これが最後の入隊式となった。ピオネール宮殿で彼はプライドを持って旗を掲げていた。レナは息子の姿を見て誇りに思った。

ポーランドへの旅行がとても気に入り、外国の都市はより美しく、女性も奇麗な洋服を着ていた。店ではどんな商品でも購入することができた。

17. 次男の誕生

1990年3月14日、最初で最後のソ連邦大統領ミハイル・ゴルバチョフが選挙により誕生した。5月にソ連の消費マーケットでパニックが起こった。不足する物の数がより一層増えた。穀物の記録的な豊作にもかかわらず、この状態を救うことができなかった。なぜならば、主のいない企業、未発達の交通機関の影響で、この豊作の大半は台無しになってしまったからである。

この年、レナは次男を妊娠した。夏休みを実家で過ごした。牛の草刈りの手伝いをしてから、去年同様、数日を森の小屋で過ごした。大勢で行ったため、ボートではなく15km歩いて行くことになった。皆は、レナが歩いて行けるか心配をしたが、問題なくたどり着いた。秋の終わりにレナのお腹は大きくなっていた。夫がたくさんのスイカとメロンを食べさせたので、自分の足が見えないくらいレナのお腹は大きくなった。次男は4,150gでまるまるとして、元気に生まれてきた。

次男を生んでから、レナは自分の人生を全うしたと満足だった。

次男は大変面白い子供だった。普通の赤ちゃんは2時間半寝て、30分くらい起きるというのを繰り返すのに、次男は生活パターンが正反対で40分寝て長いこと起きていた。おとなしくして、壁にかかっていた地図を見つめていた。

長男が生まれた時と同じように、親戚がそばにいなかったが、次男の時はとても楽であった。産婦人科病院に夫が車で送り、買い物も彼がしてくれた。

1991年の春に、多くのストライキが起こった。しかし、レナ家族には影響は全く無かった。夫

は以前同様、地球物理探査部で仕事をしていた。その他、小さな企業も設立した。彼は魚やトナカイの肉を北極地域から町まで運ぶ仕事をしていた。稼いだ金を全て自宅で保管していた。一つのタンスの引き出しでは収まりきらない程あったが、この金を使って何も買うことができなかった。たまに、食料品店の棚には塩とパンしか並んでいなかった。日用品店でトイレットペーパーを買うための長い行列ができていた。レナは店には行かずに、ずっと自宅で次男の世話をした。

次男はとっても早く成長した。5ヶ月の時、彼はハイハイし始めたが、最初の1ヶ月は後ろにしか進めなかった。9ヶ月になって走ることができるようになった。家ではいたずらをしていた。

18. ソ連邦共産党の活動禁止

1991年6月12日、ロシアソビエト連邦社会主義共和国[17]の大統領としてボリス・エリツィン氏が選ばれた。レナ家族はちょうど飛行機に乗って姉の住む町へ向かっていた。夏休みが始まり、長男を実家へ預けるつもりだった。夫は忙しく働いていたので、レナ達に同行できなかったが、1人で残るのが辛かったのでレナは次男と夫のもとへ帰った。

国家緊急事態委員会が形成され、モスクワへ軍が侵攻した。レナはその時、長男を迎えに行った。

エリツィンがロシアソビエト連邦社会主義共和国において共産党活動禁止令を発したので、レナの父はとても納得できなかった。レナは父と喧嘩した。もともとレナは平和主義であったが、父は軍の侵攻に賛成していた。血を流しても国の秩序を取り戻し、従来の制度を保つことを望んでいた。レナは、血の繋がった家族からこのような考えを聞かされ驚いた。しかし、昔の人にとってイデオロギーの崩壊を見るのは辛いことであろうと思われた。

不動産売買が可能になった。市場経済の捉え方は人様々であった。多くの企業は自分たちの設備や建物を売り始めた。レナの夫はこの混乱を利用し、大きなトラックとキャンピングカーを購入することができた。

1991年10月28日に人民代議員大会で市場改革のプログラムが承認された。貨幣価値は数百分の1となった。貯金を持っていた人は全てを失い、一からやり直さなければならなくなった。レナ家族は簡単に乗用車が買えるほどの貯金7,000ルーブルを持っていたが、まさに数ヶ月後この金で買えたのはスーツ1着だけであった。

19. 別荘

1992年4月に、これが最後になったが、地質関連企業の労働組合から黒海への無料旅行ツアーが与えられた。長男の夏休みは通常の3ヶ月ではなく、4ヶ月半となった。昼によく散歩した。黒

海地域では既に花が咲き、海風はレナたちを癒した。

黒海の海岸で休んでから、やや北の大連邦構成地域行政中心都市[18]に不動産を探しに行った。冬に、夫は二つの仕事で3,000万ルーブルを稼いだ。インフレで価値が下がる前に投資するよう急いだ。もちろん、暖かい地方でアパートを買いたかったが、この金では倉庫すら買えなかった。夫の親戚のところに泊まることができたので、この連邦構成地域行政中心都市にした。

1992年5月にこの連邦構成地域行政中心都市から20km離れた都市型集落にある別荘を買った。木造の二所帯住宅で3部屋のアパートであった。暖房はペーチカで、水道はなかった。1ヶ月後、この不動産の価格は5倍に跳ね上がった。川に面して、松林があり、この都市型集落の位置はとてもよかった。夏は暑く、よく泳いだ。

家族全員はそれぞれ好きなことをやった。夫は家の修繕をした。レナは畑を耕し、家事をした。レナは洗濯をしてから、川で泳ぐのが気に入っていた。このような経験をしたことがなかったからである。畑でレナの夫は温室を作り、そこでトマトとキュウリを栽培した。全く経験がなかったが、夫は必死に大型車2台分の肥料を持ってきたので、その年は豊作だった。農村の新鮮な牛乳と卵を現地の人から買った。北から多くの友達がレナを訪れた。皆は別荘を見たかった。素晴らしい夏を過ごした。子供たちは農村の新鮮な空気のおかげで早く成長していた。

北の鉱業都市で食料品の質がどれほどよくなく、まずいか忘れてしまった。配達に時間がかかり、本来の美味しさを失ってしまう。レナは間違えて、半生の目玉焼きを次男に食べさせ、次男はサルモネラ菌にやられてしまった。1ヶ月以上も入院していた。それのせいで、免疫力が低下し、よく病気になった。

20. バウチャー

1992年8月に国家財産のバウチャー方式による私有化が始まった。これは一体何を意味しているか、一般の人々には理解できなかった。ロシア連邦の全国民が国家財産の分割所有をしているというバウチャー[19]をもらった。しかし、この証明書で何ができるか説明を受けなかった。一般人は経済的知識が絶対的に不足していたこと、そして手に渡ったバウチャーに関する情報も不足していたことにより、多くの人々は困惑した。レナより年上の友人達は、どこでバウチャーを利用するかお互いに相談しあった。しかし、レナと同じように多くの人々はバウチャーをネズミ講（詐欺グループ）に渡してしまい、シャボン玉のように消えた。

レナの夫が働いていた職場で労働者はバウチャーを一本のウオツカに換えた。多くの人々にとっては、ソ連からの贈り物の分け前はこのようにゼロとなり、ソ連時代の生活も終わった。

自分の家族を養うために、レナの夫は地球物理探査部時代の同僚と同探査部のキャタピラ・オフロード車を数台購入して、都市から離れた集落から北方の魚を仕入れて都市へ配達するシステムを

つくりあげた。以前地質探査が行われていた地域の集落に食料品を供給し、そこで現地の人から魚や北極圏動物の毛皮を購入した。

この仕事は、遠く離れたトナカイ牧畜集落まで冬道で行ける間の季節限定のものであった。冬道は大変危険だった。冬は極寒で、吹雪いた。春になると、この海に至る数百キロ以上の雪道にある多くの川や湖は融け始め、走行中に氷が割れ、川や湖で水没する可能性があった。

ソ連崩壊後、レナが住んでいた北の鉱業都市の栄華は終った。地質探査に対する国家援助がなくなり、地球物理探査部はまだ存在していたが、大量にリストラが行われた。夫が担当していた地質探査グループも半分になった。そこでデータ処理の仕事をしていたほとんどの女性がクビになった。1993 年に地球物理探査部は完全に閉鎖された。皆それぞれ新しい道を探した。ある人は学校の先生になり、多くの人は確実にお金を稼げる市場で商売を始めた。大半の人はこの北の都市から去った。10 年間でこの都市の人口は半分になった。国家援助がなくなり石炭採掘が赤字になったため、人々を集落ごと移住させた。

21. 1993 年夏

1993 年 5 月、レナの長男は 5 年生を終了し、レナ一家は別荘へ行った。畑でいろいろな作物を植えたが、農業をする気がなくなったので、好きな旅行をすることにした。旅行会社を訪れ、そこでクリム半島へ行くグループのオーガナイザーにならないかと誘われた。

レナの旅行代金は無料だった。グループの参加者はレナの言う通りに行動してくれたので、あまり仕事がなかった。またいつも通り夫が手伝った。

クリムから帰って、すぐに別荘へ戻った。レナたちは別荘が恋しくなった。夏は雨が多かった。毎日雨が降った。森への散歩も川で泳ぐこともできなかった。そのためレナ達はまた旅をする決心をした。やや北の大連邦構成地域行政中心都市から北の鉱業都市までのルートを車で行く計画を立てた。約数千キロあった。10 日間以上、車で北の道を走った。

車に荷物・寝袋・カラーテレビを積み込んだ。このテレビは休暇の初めに購入した。別荘に冬の間置いておくと、盗まれる可能性があるからだ。そして 2 人の子供を乗せ、北を指し示すコンパスを持って出発した。

レナは夫と地図上で最短の道を選んだ。彼らの職業上の経験は、ルート選択にはまり役立たなかった。当時、地方に住んでいる人は、遠くへ出掛けることはあまりなかったので、レナの友人達も誰一人としてルートについてアドバイスできなかった。レナたちは道の情報をどこからも手にいれることができなかったので、自力で検討して探そうと決意した。500km を超えたところで、当初のルートを大幅に変更しなければならないことが判明した。なぜなら連邦構成地域境界付近では 30km にもわたって道がなかったからだ。晴れた日は、地図に描かれている泥道を行ったが、雨が

降ると道はぐちゃぐちゃになってしまった。トラクターでさえ通ることが不可能だったため、現地の人はレナ達にリスクが高すぎるので辞めるよう説得した。

迂回するのに400kmもかかった。いつもの通り、休憩もせず道を進んだ。大河を渡るため渡しイカダで向かった。

これが初めての車旅行であったが、様々な出来事と冒険に満ちた楽しいものだった。町と町の間の道のりは楽しかった。時々森で休み、ベリーを採ったり、ただ散歩をしたりした。

町の中心部で交通事故を起こした。次男は額にかすり傷を受け、持ち合わせていた現金で被害者の車修理代を支払った。レナたちは事故で大変動揺した。それから先のルートには道が無かったため、車を列車に乗せた。友人から借金をしなければならなかった。現在でも北の鉱業都市までの自動車道路はなく、数百キロにわたって鉄道しか通っていない。

車は他の2台と共にオープン車両に固定された。事故でお金がなくなったため、レナは自分の車に乗り、2日間もこの列車で行かなければならなかった。無事に北の鉱業都市までたどり着いた。やっと夏の冒険が終わった。

22. 1993年冬

1993年12月はレナの一生の労働期間を継続するために、仕事に出なければならなかった。極北地域では年金をもらうためには、15年働かなければならなかった。退職年齢は女性が50歳で、男性が55歳であった。中緯度地域と比べると5年も早かった。

次男は3歳となって、育児休暇が終わった。家の隣にあった幼稚園に次男を入学させた。よく病気になったので、よく欠席した。レナは1日たった3時間しか働かなかった。またサークルに応募した。少年少女と遠足したり、地質学の基本を教えたりした。

次男は長男より元気な子で成長したが、よく風邪を引いた。長男の全てを真似した。3歳でアルファベットを覚えて、両親を驚かせた。

全国的にリストラが行われた。国家援助を与えられず、地質関係の企業は次第に閉鎖された。多くの人々は仕事を失った。レナの夫も1994年に仕事を辞めざるを得なかった。成功していたキャリアは制度の急変によって台無しになってしまった。運良く、先見の明ある夫の会社が、無事に活動していたのは救いであった。

レナは相変わらず金のためではなく、満足のために働いた。全国地質学コンクールに参加するために子供たちを指導した。レニングラードの旅を計画して、1994年4月にコンクールに「若い地質学者」を連れていった。国によって支払われた最後の旅であった。

23. うまく行かなかった引越

1994年春、レナ一家は新たな計画を実現するため取りかかった。北の鉱業都市からベルゴロド州へ移り、大きな家を建て、黒土地帯を開発するつもりだった。北の鉱業都市の住人の夢は、北でたくさん金を稼いで、南の地へ引っ越すことだった。皆は、一時的に北の鉱業都市へ出稼ぎに来たつもりだったが、多くの人は人生の大半をそこで過ごすことになった。ずっと庭付きの家を夢見ていた。

もし40歳までにこの北の都市から引越をしなければ、生活パターンを変えるのは難しかった。リストラが積極的に進められ、多くの人は南の地域へ引っ越すことを決意した。レナの家族もそれを望んだ。最初、夏休みの時に様子を見ることにした。列車に乗り、モスクワ経由で安く買える農村まで行った。

その農村での生活は全く魅力的ではなかった。仕事後、さらに畑仕事をすることにレナ一家は馴染めなかった。農村の学校の教育レベルは低かった。そのため引越の中止を決めた。せっかく来たのだからと、夏はそこで過ごすことにした。

100年前に建てられた家に泊まった。その家の床は土で、唯一の部屋には大きなロシアのペーチカがあった。小さな窓が床近くにあった。近所の人はとても優しく、いつも瓶漬けの漬物や新鮮な卵を持ってきてくれた。他の南部地方に住んでいる人と知り合いになり、彼の故郷へ行くことにした。この地域よりフルーツ畑が多く、ドン川が流れていた。岸には松林があった。

そこで、ベリーやキノコを採ったり、別荘にいるような生活を送った。夏休みの終わりに車を売り、北の鉱業都市へ帰った。これは南部地方へ引越する2回目のチャレンジだったが、失敗に終わった。北部地方はレナの家族を離さなかった。

24. 不動産購入

6月下旬に北の鉱業都市に戻って、家族は初めて夏を北極圏内で過ごした。いつも子供たちを初春から秋まで北極圏外に送るようにしていた。だが、この年の夏は暖かく、ホームシックにもなったため、家に残ることにした。友達も近所の人たちもレナたちがどこにも引越さなかったことを喜んだ。家族全員で川に行って、そこで日に焼けた。川の水はとても冷たく、汚かったが、水泳をしていた人もいた。家の近くにあった峡谷へ行って、そこで蚊に刺されながらも散歩した。この年の夏にレナの長男は「商売」をやっていた。友達と空き瓶を集め、リサイクルセンターへ渡して、ポケットマネーを稼いだ。だからよく1人で出かけた。ある時、レナが夫と散歩していると、向こうからだらしない格好をした子供たちが歩いてきた。その中にレナの息子がいた。そんな格好で出会ってしまいとても恥ずかしそうだったが、長男は空き瓶が入っているバッグを持って、とても満足し

ていた。

1994年6月に夫は職を失った。労働手帳に「地球物理探査部解体による免職」と記入されていた。

1994年9月に長男はリセーに入学した。リセーは北の鉱業都市の基準からすると家から遠かった。バス停で五つも離れていた。大吹雪や厳しい寒さの日は不便だった。ただし、リセー自体は大きくなく、とても心地のよい建物にあった。そこでこの都市の一番良い教員を揃え、グループは小さく、25人までであった。子供たちも学力の厳しいチェックを受けた。入学試験を受けて入学した。長男は新しいグループに早く慣れた。勤勉に宿題をして、クラスの優等生となった。

レナはこのリセーで地質学を教えることを頼まれた。1994年9月より地質学に興味をもっていた子供たちに「若い地質学者」というサークルで教えていた。労働時間は相変わらず少なく、多くの時間を家族と子供のために費やした。

次男は幼稚園に通っていたが、度々病気になり、よく休んでいた。レナの仕事のスケジュールも忙しくなかったので、幼稚園を休ませても世話ができた。

夫は正式に職業紹介機関に1994年10月から1995年10月まで登録していた。だが、失業手当だけでは足りなかったので、夫は貿易をした。当時、貿易することによって膨大な利益をあげることができた。マージンは300%〜400%であった。ただインフレは貯金をすぐに価値の無いものにした。レナ家族は中緯度地域でアパートを未だに持っていなかった。

それで1994年10月に「やや北の大連邦構成地域行政中心都市」へアパートを買いに行った。ロシアでは住宅建設は全体的にほとんど行われなかった。売りに出された古い住宅はとてもひどい状態のもであった。アパート探しをするのにも時間がなかった。なぜならば、無給休暇をとって、家には小さい子供たちも残していた。ついでに、北極狐の毛皮を売るために持ってきた。結局、知り合いのネットワークを使って毛皮を売り、4Kのアパートも知り合いの紹介で見つけた。未完成のアパート式住宅に投資した。とてもリスクが大きかった。1994年10月に総面積84㎡のアパートを4,400万ルーブルで購入した。建物の竣工予定日は1995年の夏となっていた。この購入で極北地域から引越しできるようになって、心は楽になった。夫も「財産ができた」と言っていた。

1994年11月に北の鉱業都市から南に数百キロ離れた小都市へ行った。大好きな女友達の結婚証人として結婚式に出た。彼女は2回目の結婚であった。恋愛結婚ではなかったが、新郎はよい人であった。やはり、1人で子供育てするのはいつの時代も難しい。あの恐ろしい時代に女友達は大学卒の地質研究員と同様に貧困に陥った。新郎のおかげで2人の娘を養育でき、教育を受けさせることができた。結婚式は彼女の家で行われた。2Kの木造の一軒家であった。共同トイレが外にあって、ゴム製の靴がないとそこまでたどりつけなかった。だが喜んで結婚を祝った。まさにただ単に生きているだけで、人生を味わうことができた。

知り合いや同僚と特に何もなくてもよく家に集まった。店での商売はまだうまくいってなかったが、女性は美味しいパイを焼き、サラダを作って、女性同士のパーティーを開いた。レナは美味し

いサーモンパイを焼いた。当時、レストランや喫茶店はあまりなかったし、悪いサービスの割に高い料金を払わされた。

服装は質素なものだった。よい服はまだなかった。レナの夫はよく稼いだ。袋に詰めて魚やトナカイの肉を持って帰ってきた。売り上げで食料品を買って、キャタピーラー・オフロード車で北の鉱業都市から離れた集落まで運んで行って売った。そこで、魚と肉を仕入れた。レナ家族の暮らしは毎日よく回り続け、子供たちは成長した。

25. 資本主義の体験

6月にレナの夫は北極地域を回って、その結果1億8万ルーブルを稼いだ。この金を、やや北の大連邦構成地域行政中心都市にあった未完成住宅に直ぐに投資した。家の近くに倉庫も買った。

レナも次第に高騰しつつある物価に耐えるため、金を稼がざるを得なくなった。当時、確実に金稼ぎができた場所は市場であった。レナは友達と一緒に1995年の秋からよくモスクワへ行き、そこでモスクワの広大な市場を巡り、洋服を仕入れた。大きなバッグに積んで市場まで運んだ。大変な作業だった。レナはいつも寒かった。

11月に商品の多様化を目指し、ギリシャへ毛皮コートを買いに行った。レナはギリシャが気に入った。そこでは、毛皮コートは大変高く、自分の分しか買わなかった。

レナはたくさんの利益をあげることのできる商品を探した。タイでは物価が安いと噂で聞いた。迷わずにレナは1996年3月にタイのツアーを購入して、遠い地域まで足を運んだ。レナにとってはタイはエキゾチックだった。早速安い商品を買って、運送会社を利用して、ロシアまで送った。商品は安かったが、売れなかったものばかり買った。しかもロシアまで届いたのは、送った荷物の一部であった。

レナはまだリセーで働いていたが、金稼ぎをするのか好きな仕事をするのか、そろそろ選択しなければならなかった。5月にリセーを退職することにした。

夏に商品探しのためトルコへ行った。第一の目的はもちろん家族でゆっくりすることであったが、少しでもツアー料金を取り返すために、子供をリゾートホテルに置いて、レナたちは100km離れた大都市イズミールへ行き、大きな鞄二つ分の服を買った。税関を通った時に問題となったが、口論の末、結局ワイロも渡さずに解決できた。北の鉱業都市へ戻って、そこで知り合いたちに服を売った。経費はほとんどかからなかった。物はまだ不足していたため、皆に後払いで商品を簡単に渡せた。

レナの夫はこの貿易の仕方をとても気に入った。何トンもの肉や魚を寒い中運ぶより全然ましであった。10月にレナは夫とタイへ行くことにした。もちろん知り合いが様子を見にきてくれたが、子供を2人きりで残した。長男はまだ15歳であった。

買った服を売るために、店の場所を借りた。多くの会社は給料が遅配になっていたので、人々に後払いの形で売った。2ヶ月でタイの商品は完売となった。そのために1997年2月にまたタイへ出掛けたが、今回は次男も連れていった。

当時、地元の店では質の悪い中国製品ばかりであったので、丈夫なタイ製の服は直ぐに売れた。帰ってから、友達と集まり、お土産をプレゼントし、エキゾチックな国について話をした。レナのアパートは倉庫のようだった。

だが、もっと色んな商品を扱いたくなった。貯金をして1997年4月にスペインへ行った。このように、市場を巡って、世界の地理を学んだ。スペインから靴を持ってきた。とても質がよく、優れたデザインだったので、地元では大人気となった。

冬が終わると売り上げが下がった。皆、南部地方へ長い間行ったからである。レナも別荘へ出掛けた。例の連邦構成地域行政中心都市では、二つのアパートとも未完成だった。レナ家族は、長男が学校を卒業するまでは引越しをしないという計画だったので特に急いでいなかった。しかし、やはり心配した。

レナは特に正教信者ではなかったが、やや北の大連邦構成地域行政中心都市で自分と子供を洗礼させた。8月末に別荘を売った。1992年にこの3Kの別荘を約30ドルで買ったが、1997年に3,000ドルで売った。ロシアの物価はこんなに高騰した。旧ソ連構成共和国の移民はロシアのいたるところで古い住宅でも買った。別荘を買った家族はアゼルバイジャンの首都バクーの中心にあった3Kのアパートを売ってきたが、その金でロシアでは田舎の古い住宅しか買えなかった。

1997年9月に次男も長男が通っていた学校に入学した。レナは夫とまたスペインへ行くことを決めた。だが、空港に行ってから旅行会社のミスで航空券が使えないことが判明し、次の便を長い間待たなくてもよいように、タイへ行った。丁度その時、アジア金融危機が起こった。この年の2月に1USドルは24バットであったが、10月に行った時に既に55バットとなっていた。インフレはまだ進んでいなかったので、持ち金でレナはたくさんの商品を手に入れることができた。

1998年1月にロシアで通貨改革が行われた。切り上げによって、1,000ルーブルが1ルーブルとなった。この年の8月に、ロシアに金融危機が訪れた。USドルに対してルーブルの価値は5分1となった。それにもかかわらず、レナはまた冬になるとタイへ行って、商品を店で売った。この年税金も払うことができたが、まだ税金システムがよく機能してなかった。多くの場合、税務官は監査に来て、罰金を払わせた。多くの人はワイロを渡した。税務関係の仕事をしていた人を通じて税務官が来る前に連絡をもらった人の話も耳にした。いずれにせよ、税制が次第に機能し始めた。

1999年5月にレナの夫は次男と一緒に、やや北の大連邦構成地域行政中心都市へ行った。彼は、完工したマンションの内装工事を始めた。ロシアでは、新築の物件にはたいてい内装工事は含まれていない。この4ヶ月でレナの夫は、内装業者を雇い、自宅を完成させた。レナは長男と北の鉱業都市に残っていた。長男は高等学校の卒業試験を受けた。その後レナは店をやめ、2人でモスクワへ行き、長男は大学に入学した。

レナは2人の息子を夏キャンプへ送った。そしてレナは夫の内装工事を手伝った。持ち金はどんどん無くなっていったが、新居は奇麗に出来上がった。3階建てで、地下にサウナを作った。システムキッチンや他の家具は全て松の木のものを選んだ。レナは、8月に北の鉱業都市へ息子を迎えにいった。長男はすぐにモスクワへ引っ越した。駅で長男を見送った時、北極圏での生活が終わったとレナはとても寂しくなった。

レナは前の家の家具を売ったり、友達に譲った。残りの荷物を夫とコンテナに積み、列車で送った。友達と別れて、北極圏から去った。長男はすでにモスクワに引っ越したので、やっとレナ一家は北部地方から開放された。

26.「やや北の大連邦構成地域行政中心都市」

1999年9月、レナ一家は住居をやや北の大連邦構成地域行政中心都市へ移した。次男はギムナジアの入学試験を受けて、3年生となった。長男は、新しいマンションまで大学寮から半日しかかからなかったので、頻繁に帰ってきた。レナは店の賃貸契約を結んだ。そこでは子供服を扱った。やや北の大連邦構成地域行政中心都市には知り合いがほとんどいなかったが、仕事が忙しかったので寂しくなる暇はなかった。テレビさえ観る時間もなかった。モスクワでのテロがテレビで放送されていた。

店の商品を増やすために、11月に次男を長男に預け、商品買い付けのためタイへいった。新年にたくさんの利益を得た。いくつかの店を開くことができた。ロシアの生活はよくなってきた。最初のロシア連邦大統領エリツィン氏は、大統領を辞任した。若い政治家プーチン氏が国家の代表になった。全国民は変化を望んだ。社会主義のソ連は不平等な社会であった。資本主義になってから、成功するにはたくさんの仕事をしなければならなくなった。

引っ越し先の都市は、以前住んでいた北の鉱業都市より大きく、人口が30万であった。モスクワまでは列車で半日ほどかかるが、夜行列車に乗れば、朝には到着する。

モスクワと違って、ここの市場は形成され始めたばかりで、サービス業における競争はそれほど激しくなかった。このため、この新しい都市に住み着くことができた。

レナは旅行が好きである。彼女にとって、知らない場所は魅力的であり、ソ連時代にも、子供たちのグループと一緒に何回も旅行した。そのため、引越後しばらくしてから旅行代理店を開いた。必要なライセンスを取得し、モスクワの旅行会社と提携して、現在新しいビジネスにおいても成功を収めている。

Ⅲ　分析

前章で1960年代から1999年に至るまでの、あるロシア人のライフヒストリーをまとめた。時期や生活分野別にみて、均質に記録できているわけではない。テーマとしては、家族、子育て、教育、仕事、居住地、世相などが中心である。また語り手やその家族が出張や旅行などで居住地を離れ、何回も出かけているが、その場合も行き先での見聞や印象・感想を率直に時には感情を込めて述べている。記録内容の一部は、質問をして説明を付加してもらった。また述べていただいた内容を、ここにすべて記録したわけではない。なぜなら、その量が膨大すぎるからである。またライフヒストリーの最終部で言及されている1998年8月の金融危機以降、現在まで、内外の諸要因によりロシアは社会経済的に安定してきたこと、それ以上にライフヒストリーに登場する家族は、1999年に引越をして、新たな居住地で生活の再構築に着手している。こうした画期から判断して、ここでの記録に一区切りを付けるタイミングとして1999年が適切であると判断した。なお2000年以降についてもご協力いただいたが、次の機会にまとめたいと思っている。

ここでは、ライフヒストリーの語り手であるレナ（仮名）の居住地点に着目して、その変遷を社会経済地理学的視点から検討してみたい。そのために、小俣(2006)がソ連・ロシアにおける工業の立地展開を捉える上で、提起した「集落の階層性」および「北方性」の概念を利用する。すなわち集落の階層性の図において、横軸で都市・町・村の大きさ（人口100万人以上、10万〜100万、10万以下）を表し、縦軸で中核・周辺関係（中核地域、中間地域、周辺地域）を表しており、組み合わせると場所の中心性を表している(小俣、2006: 55-56)。図1は小俣(2006)における「ソ連時代末期のロシアにおける工業の立地マトリックス」の図に「北方性の強い地域・やや強い地域」を加筆し、その上にレナの居住地の変遷を上書きしたものである。次に、北方性とは、ある場所の人間居住ないしは人間活動に対する自然条件の厳しさを相対的な関係として表現したものである(小俣、2006: 66)。そして、図1にも示されている「北方性の強い地域・やや強い地域」を、具体的に確認できるように図2を示しておく。この図によって、北部地方の範囲や生活条件の厳しさの広がりを検討することができる。また、そうした厳しさのために設定された、北部地方に対する優遇政策が給料、手当、特典、年金支給、奨学金など様々の面で認められた。その実態や住民としての受け止め方なども、第Ⅱ章のライフヒストリーの部分で、度々言及されている。

第Ⅱ章でまとめたライフヒストリーを図1に基づいて説明すると、次のようになる。レナは周辺地域の小さな村A1に生まれた。このA1や中等普通教育(第9・10学年)を受けるために引っ越した村A2は、ヒエラルキーの最下位の集落であった。ここでの選択肢はかなり限定されていた。しかも、ここから出ることは当時、難しかった。出る機会としては大学への進学か、ヒエラルキーからみて上のレベルの集落に住んでいる親戚のところへ行くことぐらいであった。それに加えて、ヒエラルキー内にあるフロンティアのため、ヒエラルキーの最上部にあるモスクワへ入ることは出来

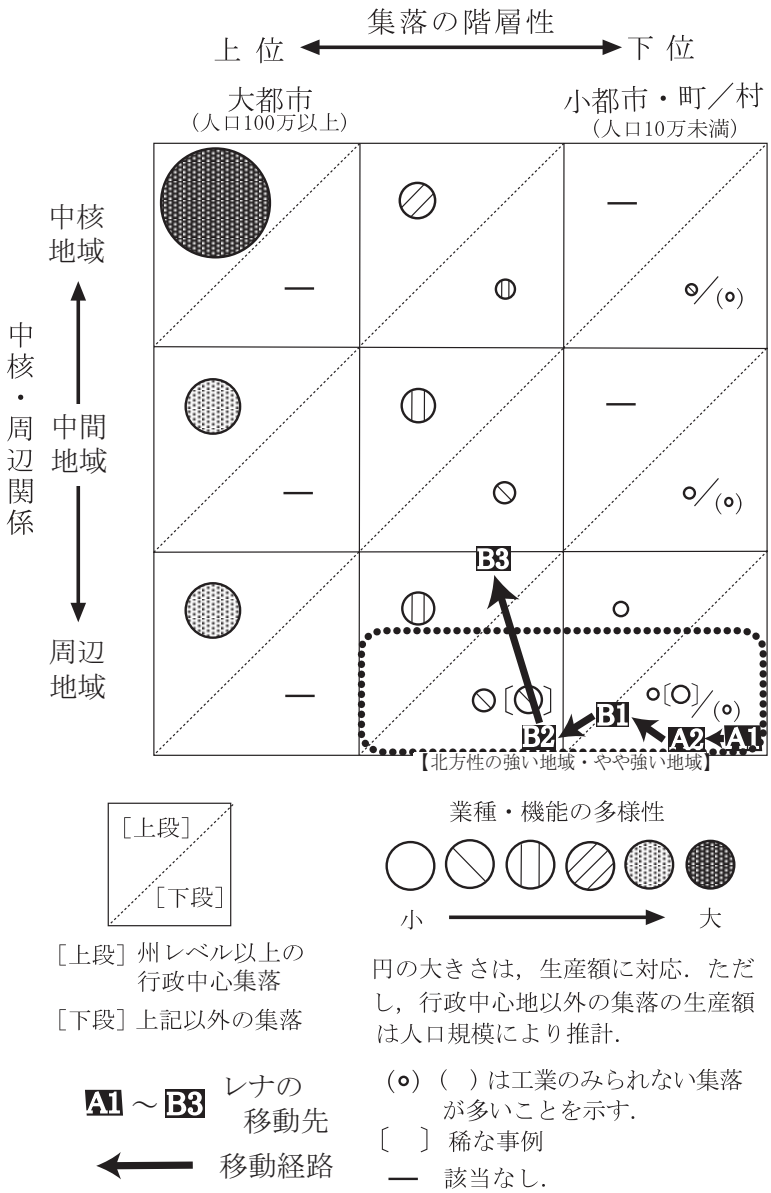

図１　ロシアにおける工業立地マトリックス（ソ連時代末期）上のレナの移動
（小俣（2006）に加筆）

なかった。例えば、レナはモスクワの大学に入学することは可能であったが、卒業後にモスクワを出て、故郷で働かざるを得なかった。さらに A1 集落で十分な教育を受けられなかったため、大学の選択もかなり限られ、地元の非ロシア人少数民族に対する優先入学制度があった大学以外には選択はあまりなかった。そのため、大学が立地していた都市は B1 で、人口は 8 万人程度であったが、それでも中核・周辺関係からみると周辺地域であった。

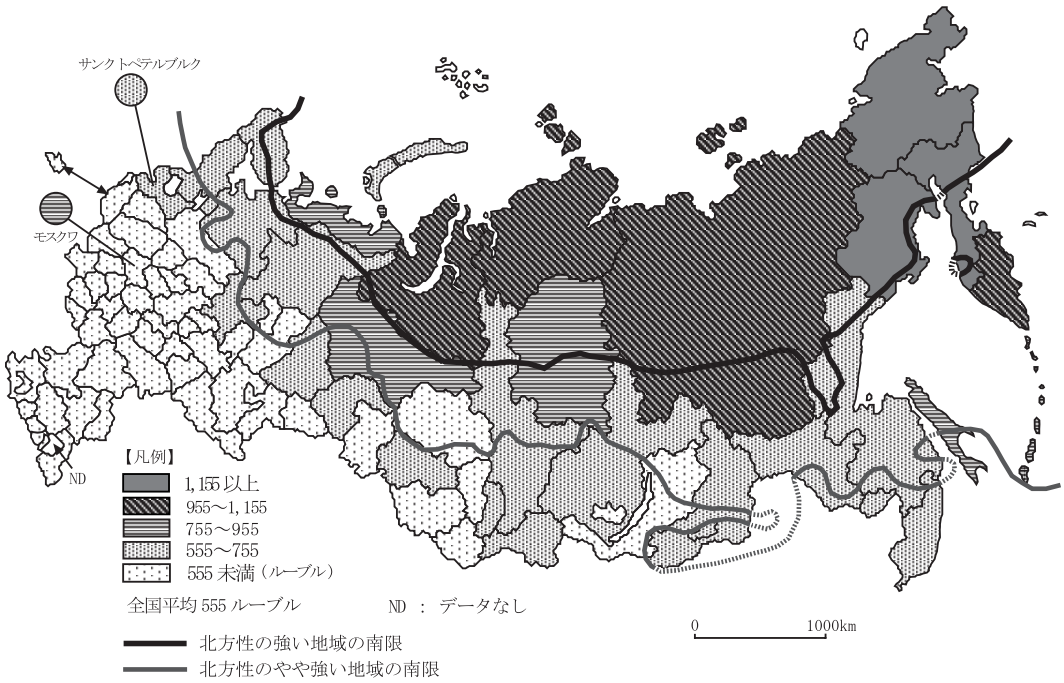

図 2　地域別労働力人口 1 人当たり月最低生活費（1998 年）と強北方性地域の分布
注）自治管区の属している地方・州は、それらを含む値である。
（小俣，2006）

ここでソ連時代の教育について、教育水準や進学移動に関係づけて、若干触れておきたい。上述のようにレナも中等普通教育を受けるために、近くの村へ引っ越している。レナが初等・中等教育を受けた時期よりも後の 1970 年代中頃でも、普通教育において修業年限など量的なものはともかく、教育の質は都市とりわけ大都市と農村で著しい格差があり、その後の進学に大きな影響を与えたとされている（Богуславский, 2004: 683）。さらに、表 1 によると、最終学歴水準は男女別格差とともに都市と農村、特に都市一般とモスクワ、レニングラードでは大きく異なっている。この指標はソ連時代に高学歴化が進んだことを考えると、当該人口の年齢構成の差による影響も受ける。しかし、都市・農村間の学歴格差は顕著であり、「学歴なし」を含めて考えても都市住民は高学歴であった。もちろん、この表は進学率そのものを示しているわけではない。しかし、上述の教育の質や教育機関の立地などを考えると、総合的には都市とりわけモスクワやレニングラードなど大都市における大学等への進学率は他地域のそれよりも相当高かったと思われる。結果的には進学に伴う地域的な移動は、レナにみるように一般的ではあったが、それがクライ・州レベルの行政中心地、さらに全ソ・全ロレベルの中心地であるモスクワやレニングラードへの移動すなわち流入となると、その摩擦は加速度的に大きなものとなったと思われる。このことは、まさに次にみる、レナの大学進学やその専門の決定プロセスにも一部、表れている。

レナの選択した専門も彼女の生まれたところ（集落 A1）と大学の立地場所（集落 B1）で決まっていた。生まれ故郷は北部地方であったため、地質学が最も人気のある専門であった。そして大学の立地していた集落も北極圏に近い場所であったため、卒業後に派遣される仕事も主要な地質探査が行われていた北極圏内に限られていた。そのため、レナの夫は大学卒業後、様々な都市を選ぶことが可能であったが、そのすべての都市は B1 と B2 タイプでしかなかったことになる。

ソ連時代に北極圏開発プログラムがあったため、この地方の引力は国家援助により生じた。国家政策が変わった瞬間に、より暖かく中心に近い地方への人口大移動が起こった。

だからこそ、レナの一家は B3 地方に移動した。この集落は北極圏外に位置し、北方性からみても「その強い・やや強い地域」の外になり、しかもヒエラルキーの最上部の都市にも比較的近くなっている。図 1 では、B3 は周辺地域のうち中間地域の最も近くの位置にあるが、B3 の立地する連邦構成地域は面積も広く、当該連邦構成地域内の位置関係からも中間地域の多くの都市よりも中核地域に近い。B3 への移動の選択は、そこがヒエラルキーの最上部の都市と接しているフロンティアに立地していたこととも関係していた。実は、移行期にその壁が薄くなっていたため、レナの一家はモスクワへ行く可能性もなくはなかった。しかし、現在では、仮に中核地域の中心により一層近いところに行こうとしても、中核地域ではあってもその地域内の人口 10 万〜100 万人の都市にしか行くことができないであろう。

この例のように、社会発展の結果として形成された社会経済地理的な構造によって規定されてい

表 1　ソ連の都市農村別男女別学歴構成（当該 15 歳以上人口 1,000 人あたり：1989 年）

		職業教育				普通教育			初等普通教育未満
		高等	不完全高等	中等	初等	中等	基礎	初等	
都市	計	136	21	212	130	189	166	100	46
	男	141	21	185	172	205	169	89	18
	女	132	20	236	95	176	164	108	69
うちモスクワ	計	264	35	199	88	180	136	72	26
	男	292	38	172	113	190	133	54	8
	女	242	34	220	68	172	139	85	40
うちレニングラード	計	213	37	227	117	175	136	73	21
	男	231	42	203	146	185	131	54	7
	女	199	33	246	94	167	139	89	32
農村	計	47	7	134	130	151	199	213	119
	男	48	7	112	191	179	207	203	53
	女	45	7	152	78	128	193	221	176
合計	計	113	17	192	130	179	175	129	65
	男	117	17	166	177	198	179	119	27
	女	110	17	214	90	163	172	137	97

（1989 年センサスより作成）

注 1）「不完全高等」とは、高等教育の課程未修了者（ただし、修了要件の半分を満たす場合）である。
　2）モスクワには若干の農村人口が含まれていたが、都市人口と合計では数値に等しい。

る、都市のヒエラルキー・システムによって、人々が社会的選択をする際の分かれ道の本数もそれらの選び方も大きくは決められているのである。このシステムでは最上部の都市は引力の中心であり、大きな選択肢を与えられている。ヒエラルキーのレベルが低下すればするほど必然的に生じてくる、より大きな中心地への引力、あるいは所得の地方間格差問題の解決や地方開発によって生じる他の諸引力に沿って人々の居場所の選択がなされてきたのである。

Ⅳ　おわりに

第1に、前章の分析のように、社会的変化を伴う地域・空間的側面の検討において、ライフヒストリーによる接近の可能性は確認できた。さらに、今回の記録内容の分析についてその方向性を示しておきたい。今回の記録だけでも、前章で若干考察した対象以外の検討可能な素材が多く含まれている。一例を上げれば、子育てや旅行で国内の南部地方が度々言及されている。そこでは顕著な南北移動を示すような別の枠組みで人々を動かす空間形成が含意されている。すなわち社会経済地理的な構造によって規定された、都市のヒエラルキー・システムとは異なった、空間特性とその形成を検討・把握する可能性が残されている。こうした研究によって、ロシアにおける国内地域の形成とその構造についての知見を豊富にすることができよう。これらを含めて、この記録の分析も継続したい。

第2に、今回の記録の今後について示しておきたい。今回の記録は1999年で一区切りを付けている。しかし、1999年以降についても既に一部話していただいており、協力が得られれば、今後の分についても記録を続けたい。また、これも協力が得られることが前提であるが、記録の一部を補充することも考えられる。

第3に今回の記録とは別の方のライフヒストリーの収集については、適切な協力者との出会いが必須であるが、それが容易ではない。しかし、出身地や職業などが異なる、別のライフヒストリー提供者を見いだして、記録の蓄積を図りたい。

最後に、こうした試みを構想してから4年、具体的な作業を開始してからでも2年以上が経過してしまった。この間、ライフヒストリーをまとめる上で、辛抱強く協力していただいた仮名レナさんに、筆者として心から感謝申し上げたい。

本稿の骨子は、経済地理学会関東支部例会（2007年3月、於：法政大学）にて発表した。

【注】

＊東洋大学大学院社会学研究科社会学専攻博士前期課程

1）『比較経済体制研究』第 13 号において、4 論文から成る「ロシア社会の虫瞰図」という特集が組まれている。なお、同誌 p.6 に同特集趣意書が同誌編集局小西豊氏によって執筆されている。
2）乗組員 2 人、航続距離 900km、全長 12.74m、高さ 6.10m で、離着陸時の滑走距離は 150m 前後である。小型であり、旅客・貨物輸送の他にも農業・消防など多目的に使われた。ソ連では 1947〜60 年まで製造された。
3）冬季のみ雪上に造られる道。かつては主にそりや馬、今日ではさらにキャタピラー車が通行する。ロシア北部地域に多く見られる。
4）当時 7 歳入学で、ここを修了後、中等普通教育学校の第 9・10 学年、中等専門学校、職業技術学校への進学もできた。
5）いずれもソ連時代の組織である。オクチャブリャータはピオネール入団の訓練を受けている第 1 学年〜第 3 学年(満 7 〜 9 歳)の児童。ピオネール団員は満 10〜15 歳の少年少女を対象とした組織の加入者。ピオネールは任意加入であったが、学校などを単位にほとんどの子供が加入していた。共産青年同盟員はコムソモール員とも呼ばれた、16〜23 歳の青年を対象とした組織の加入者。
6）ロシア式暖房で、煉瓦などを使って煙出しができるような構造になっている。室内暖房だけでなく、この上に寝床を設置することもあった。暖房以外にも調理、乾燥、換気、温水など多機能であった。イコンに対角する位置が選ばれたという。
7）他の受験生の試験結果と関係なく、試験だけパスすれば、入学できる制度。
8）ツンドラで使われているトナカイの皮でできた円錐形の移動住居（パオの一種)。
9）ソ連人は列車で見ず知らずの人といろいろな話をすることがあった。
10）大十月社会主義革命記念日。
11）ソ連邦のカザフスタン共和国の首都。現在のアルマトゥイ。
12）現アルマトゥイから約 70km のところにあり、発電などのためにイリ川をせき止めて 1970 年に建設された。長さ 110 km、最大幅 25 km、水深 42 m。
13）校外教育施設。
14）ウクライナ東部の都市。
15）ドニエプル川につられた人工貯水池。
16）通常の学校プログラムより専門科目の多い中等学校。
17）ソ連邦中で最大の共和国。現在のロシアないしはロシア連邦の前身。
18）「わずかに北方に位置する、大面積の連邦構成地域における行政中心都市」を短縮した表現である。以下この短縮表現、ないしはさらに短縮した「この連邦構成地域行政中心都市」、「この行政中心都市」などを使用する。
19）ваучер本来は引換券、クーポン券などを一般的に指すが、当時のロシアにおいて流通した特定目的の証券として民有化小切手（приватизационный чек）などと意訳される。

【参考文献】

小俣利男 2006.『ソ連・ロシアにおける工業の地域的展開―体制転換と移行期社会の経済地理―』原書房、170p.

中村逸郎 2006. ロシア住民生活からみた体制転換.『比較経済体制研究』第 23 号、pp.7-21.

Богуславский М.В. 2004. Образование. В *Большой российской энциклопедии: России.* М.: Большая российская энциклопедия.

【Абстракт】

Социально-экономическая география России в переходный период: биографический подход

ОМАТА Тосио
ШАРЫПИН Денис

С момента распада СССР прошло более 15 лет. Новая Россия претерпела кардинальные перемены. Произошел переход от плановой к рыночной экономике, трансформировалась структура хозяйственных связей, изменились ценности, само общество, возник новый тип русского человека.

Проведенные до сих пор социально-экономико-географические исследования, посвященные рассмотрению изменений российского общества в переходный период, в основном отражают трансформацию экономики и хозяйства. В данном исследовании сделана попытка на примере рассмотрения биографии одного человека отследить особенности образа жизни, изменения структуры общества в процессе образования Новой России.

Данный подход отличается от традиционного академического, где важны принципы обобщения и структуризации. Безусловно, жизнь любого человека уникальна, и с помощью расмотрения биографии только одного представителя невозможно начертить общий портрет и тенденции всего общества. Однако данный подход дает возможность посмотреть на общество изнутри, понять взаимосвязанность этой системы, определить какие выборы предлагаются человеку в данном обществе в зависимости от его социального положения и места обитания. Смысл данного исследования заключается не только в раскрытии темы и разработки метода исследования. Изложенная биография сама по себе является ценным источником, и дает возможность сделать шаг вперед к пониманию российского общества.

В данном исследовании в качестве примера была рассмотрена биография русской женщины, рожденной в одной из северных деревень, охватив период с 60-х гг. прошлого века до сегодняшних дней. Рассматривая смену места обитания с точки зрения социально-экономической географии, был сделан вывод, что набор жизненных выборов человека зависит от сложившейся экономико-географической иерархичной структуры общества. Эта иерархичная структура населенных пунктов статична, и даже сильные потрясения, кардинально меняющие направление общественного развития, не в состоянии ее быстро трансформировать. В этой системе естественный центр притяжения - главный город иерархии, который дает самый большой выбор возможностей. И чем ниже населенный пункт по иерархии, тем сильнее возникающие естественные центростремительные силы к главному центру и другие искусственные центробежные и центростремительные силы, обусловленные политикой государства по регулированию региональных различий или освоения новых регионов, корректируют выбор людей того или иного места обитания.

Ключевые слова: биография, иерархия городов, социальный выбор, переходное общество, Россия